

# 第9編 考察・総括



# 第1章 縄文時代の遺構と遺物

## 第1節 本調査における縄文時代遺跡の概況

**はじめに** 町営林土地改良事業に伴う発掘調査で、出土した縄文土器を大まかに分ければ第10表のようになる。なお、調査区外となった試掘トレンチ出土遺物は表には反映させていない。また、今回調査した7遺跡を現在の地形や距離の特徴から①上原Ⅱ・Ⅲ遺跡、②上原Ⅰ・Ⅳ遺跡、③林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡、④中棚Ⅰ遺跡と4地域に分類して考えてみた。①～③は少し距離があるが、地形学的分断は見られない。ただし①は急斜面、②③は途中に若干の平坦面が見られるものの、緩傾斜が続き段丘崖へと至る地形である。④は尾根により①～③と分断される形となる。

**各時期の名遺跡の状況** 第10・11図に調査で出土した土器を年代ごとに抽出して並べた。早期後半：中棚Ⅰ遺跡で顕著である。野島式土器（2）、鶴ヶ島台式土器（3）があり、縦条体压痕文と縦条体による条痕文を持つものも出土している（4）。4に類似する資料は林中原Ⅰ遺跡XIIでも1点ある（5）。また、上原Ⅰ遺跡Ⅱからは押型文が施文された小破片が1点出土している（1）。

前期前半：前期初頭の花積下層Ⅰ式土器や塚田式土器に限定した場合、上原Ⅰ遺跡Ⅱが顕著である（6）。次いで林中原Ⅰ遺跡XIIである。後続するツツ木式土器、関山式土器（7）は少量だが、いくつかの遺跡で出土している。有尾・黒浜式に該当すると考えられるものは見つからなかった。

前期後半：諸磯式土器が散見するが、十三菩提式土器（11）は更に少ない。また諸磯式土器であるが、a式土器を出土した遺跡は、上原Ⅰ遺跡Ⅱのみであった（8）。諸磯b式土器（9）やc式土器（10）はいくつかの遺跡で出土している。

中期前半：上原Ⅱ遺跡は五領ヶ台Ⅱ式土器の後半（13）から阿玉台Ⅰa式土器（14）が顕著である。五領ヶ台Ⅰ式土器に該当するものはそう多くない（12）。後続する阿玉台Ⅰb式土器以降（15）や勝坂式土器（16）はごく少量である。

中期後半：上原Ⅱ遺跡以外の遺跡で出土が認められる。中でも上原Ⅰ遺跡Ⅱが顕著で、加曾利E式（17・23）、曾利式（20）、柄倉式（18・19）、郷土式土器（21・22）がある。

後期前半：林中原Ⅰ遺跡XIIの試掘12トレンチからは、多くの称名寺式土器（25）や加曾利E IV式新段階（24）の資料が出土している。上原Ⅳ遺跡IVで堀之内式土器の出土が顕著である（26）。また堀之内式期の敷石住居も検出されるなど、後期前葉の集落であることが窺える。

後期後半：上原Ⅳ遺跡IVでは加曾利B式土器と思われる資料が、いくらか出土している（27）。また、中棚Ⅰ遺跡では安行式に該当するかと思われる小破片が出土している（28）。今回の7遺跡の調査では、後期後半から資料数が激減し、明確に晚期前半に該当すると断言できる資料は出土しなかった（註1）。

晚期後半：上原Ⅳ遺跡IVにおいて、水I式併行と考えられる浅鉢が出土している（29）。

**土器にみられる他地域との交流について** 前期初頭及び中期初頭については、第1章第2・3節で述べることとし、ここではそれ以外の時期の資料について触れてみたい。

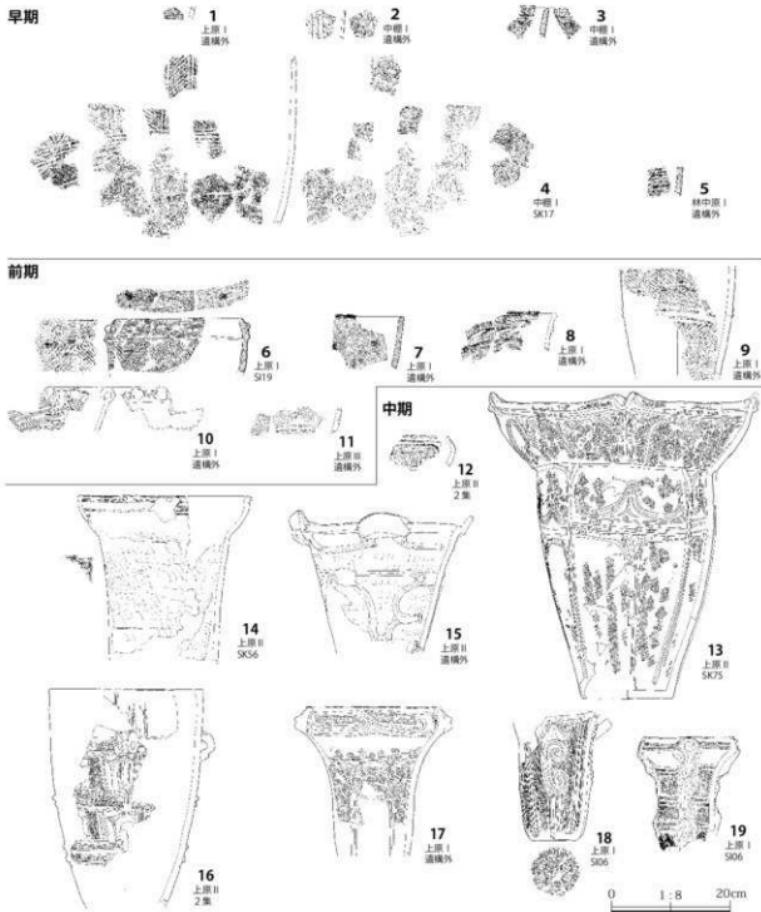
まず、早期で1のような押型文は、長野県側の影響を受けた資料である（註2）。

前期後半の諸磯b式土器（9）は浮線文が角ばかり、長野県側の影響を受けたものであると言えよう（註3）。

中期前半の上原Ⅰ遺跡に見られるような、柄倉式（18・19）は、北信地域である長野県中野市千田遺跡に好例がある土器型式である（註4）。ただし19は口縁部の形状が柄倉式土器とは異なる。また中期後半の上原Ⅲ遺跡にあるような郷土式土器は、浅間山麓一帯で出土例があることが多くの研究で触れられている（註5）。

なお、上原Ⅳ遺跡IV出土の加曾利E IV式土器（23）について、体部中央にくびれを持つ特徴は長野県方面でよく見られる特徴である。

後期後半から晚期後半は事例が少ないが、長野原町や旧倉渕村、西毛地域などでは晚期後葉・末葉の特徴を



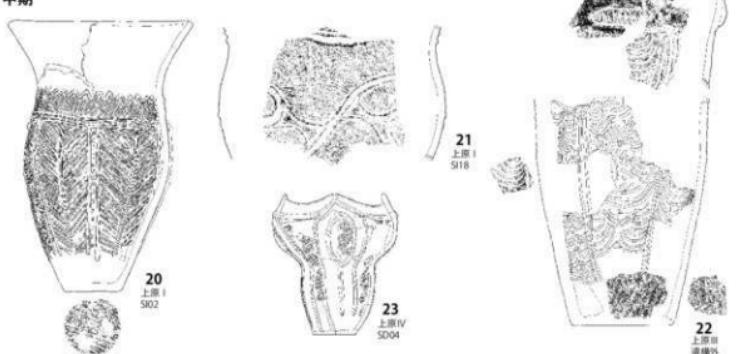
第10図 本調査で出土した縄文土器①(1/8)

持つ土器を出土する遺跡があり、長野県小諸市氷遺跡の事例も含め、浅間山麓周辺地域に該期の遺跡が目立つことから、相互交流が想定できよう。以上のように早期から晩期に至るまで、本調査の出土遺物から東信・北信地域との関係を随所で窺うことができた。

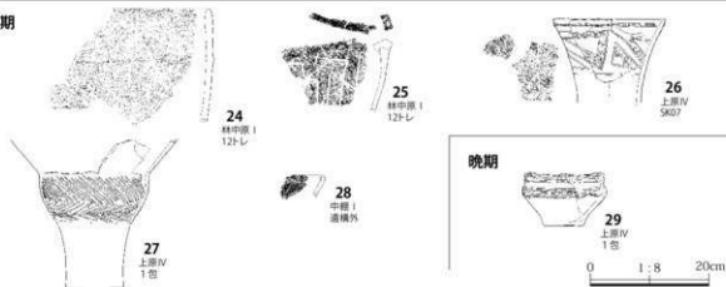
**遺跡の継続年代と立地について—本調査を基軸に既往の調査との比較—** ①の地域は出土土器を参照すると、押手沢を隔ててはいるが、至近距離なのに前期前半～中期後半までは時期が重複しない。多少の移動を繰り返しながら土地利用が行われていたことが窺える。ただし、関山式土器に後続する有尾・黒浜式土器が認められず、諸磯b式、c式土器が出土するように、1・2型程度の断絶期間はあると思われる。

②③は上原I遺跡IIが前期初頭の集落である。事業団調査の上原I遺跡ではその続きが発見されているよう

中期



後期



晩期



0 1:8 20cm

第11図 本調査で出土した縄文土器②(1/8)

である(註6)。また本調査の林中原I遺跡Xは遺物が少量出土しただけであったが、事業団調査の林中原I遺跡では、前期初頭の住居跡が見つかっており、上原I遺跡IIとの関連が気になるところである。この他、林中原I遺跡Xでは前期後半の諸磁式期の住居が検出されている。中期前半は上原IV遺跡IV・林中原I遺跡XIで遺物は出ているが、自然流路出土ということや上原II遺跡・IV遺跡IV間で遺物が接合するなど(註7)、上位からの流入によるものが多いようである。上原IV遺跡IVではSK12が該期の遺構であると言えるが、集落があったとしても本調査区からは少し離れた所なのだろう。また、本遺跡群から東には立馬II遺跡が、④の地域には櫛木II遺跡があり、五箇ヶ台II式期の集落が発見されている。遺跡の立地は上原II遺跡と類似しており、この3つの遺跡がどのような関わり合いを持っていたのかが今後の問題となろう。

中期後半は上原I遺跡II・林中原II遺跡Xで集落が検出されている。林中原II遺跡Xの3~5区は遺構が無い状況で、隣接地の調査でも遺構は検出されていない。上原I遺跡IIとの間に空白が生ずるか距離が近く、お互いに何らかの関係を有していたと考えられる。また林中原II遺跡の事業団や町教委調査(林中原II遺跡XI・XII)では中期後半から後期前半にかけての集落が発見された。一方、林中原I遺跡では町教委調査により中期後半から後期前半にかけての集落(林中原I遺跡IV・IX・XIV・XV)が多く検出される。

このように林中原I・II遺跡の中期後半から後期前半にかけての集落は、近い位置に存在することが分かる。地形を画するようなものが見られないことから、やはりお互いに何かしらの関係を有していた可能性がある。なお上原IV遺跡は、本調査や事業団調査を加味すると後期前半や加曾利B式期の集落や遺物が検出されている。

以上のことから中期から後期にかけての集落変遷の大まかな流れを捉えるならば、上原I遺跡・林中原II遺

跡→林中原Ⅰ遺跡・林中原Ⅱ遺跡→上原Ⅳ遺跡という居住域の変遷が窺えるだろう(第12図矢印参照)。

④は早期後半の資料が出土したことが特徴的である。周囲には早期の集落である榎木Ⅱ遺跡が所在するなど、早期の遺跡が多く存在する地域である。また、榎木Ⅱ遺跡では黒浜式期の住居が検出されるなど、①～③の地域とは異なる時期の遺構も見られ、今回の調査でほとんど出土しなかった時期の資料を補うかのように④でその時期の資料が出土している。なお、立馬Ⅰ遺跡でも早期の集落が発見されており、該期は④やその他の地域に集落が形成されるようである。

以上のように林地区の河岸段丘上における人々の活動の一端を垣間見ることができた。更に調査事例が蓄積すれば、詳細に活動を追うことができるだろう。

第10表 本調査出土の縄文土器

	① 上原Ⅱ	② 上原Ⅲ	③ 上原Ⅰ	④ 上原Ⅳ	⑤ 中原Ⅰ	⑥ 中原Ⅱ	⑦ 中原Ⅲ
早期後半	○	○	○	○	○	○	○
前期前半	○	○	○	○	○	○	○
前期後半	○	○	○	○	○	○	○
中期前半	○	○	○	○	○	○	○
中期後半	○	○	○	○	○	○	○
後期前半	○	○	○	○	○	○	○
後期後半				○			○?
後期前半					○		
後期後半						○	

「○」：主体を占める時期 「○」：主体的ではないが出土が認められた



第12図 林地区遺跡群位置図(1/15,000)

## 註

- (1) 本報告書の序説第2章第2節に記したように、後期後半からの遺跡数の減少は長野原町の傾向とも言えよう。
- (2) 第10図1は、中部地方などで出土している種別式土器の押型文と思われる。
- (3) 北白川下層式の横位の浮線文は「突帯」と形容されており、角ぼっている特徴がある。一方で諸磯式土器の浮線文は丸みを帯びており、新しい段階になっていくと浮線文は扁平化する傾向があるという違いがある。本事例は浮線文が角ぼる特徴が北白川下層式土器に類するが、縄文や器形などは諸磯式土器の特徴を持つ。このことから北白川下層式土器そのものとは言い難く、北白川式・諸磯式土器分布図の間に位置する、長野県など中部地方の影響と捉えかえすこともできるだろう。
- (4) 新潟県長岡市柄倉遺跡が柄倉式土器の標識遺跡である。上述の千田遺跡の報告((財)文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 2013)や第26回縄文セミナーなどの検討から、柄倉式土器の中心地域が長野県北部の可能性が高い。また隣接する魚沼地域、上越・糸魚川地域に分布が広いことが寺崎裕助氏により述べられている(寺崎 2013)。
- (5) 織田弘実、関根慎二氏らの研究がある(織田 2011、関根 2008)。
- (6) 第9編第1章第2節で集落の様子について若干触れている。
- (7) 上原Ⅱ遺跡 67図1～4が該当資料である。

## 参考文献

- 関根慎二 2008 「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要』26 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 綿田弘実 2011 「郷土式土器の変遷と分布」『佐久考古通報』No.107 佐久考古学会
- (財)文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 2013 『千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告98
- 寺崎裕助 2013 「新潟県における中期中葉後半の様相—柄倉式を中心に—」『第26回 縄文セミナー 縄文中葉土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会

## 第2節 花積下層Ⅰ式土器と塚田式土器

**はじめに** 上原Ⅰ遺跡Ⅱでは縄文時代前期初頭の集落が発見された。該期の住居跡は、本調査で9軒（ただしSI26は掲載しうる土器が出土しなかったが、平面プランや覆土から前期初頭と考えられる。）、現在、整理作業中の事業団調査部分で8軒検出し、合計17軒となる。

周辺遺跡における前期初頭の住居軒数は、坪井遺跡Ⅱで1軒（長野原町教育委員会2000）、林中原Ⅰ遺跡で1軒（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014）、現在、整理作業中の事業団調査部分の林中原Ⅱ遺跡でも數件検出されている。ただし、坪井遺跡Ⅱを除くこれらの遺跡はさほど離れていないので、同時に何らかの関係性を有していたものと考えられる。

さて本調査出土の該期の土器群は、北関東（群馬県）に多く分布する花積下層Ⅰ式土器と東信地域に多く分布する塚田式土器で構成され、両者の特徴を合わせ持つ土器も出土した。ここでは、これらの土器群について軽くではあるが触れてみたい。

**花積下層Ⅰ式土器** SI19 第36図1は口縁部に撚糸側面圧痕による菱形の文様が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。SI25第61図1は沈線で複合鋸歯文が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。同図3は撚糸側面圧痕による渦巻文が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。SI27第70図1・2はが体土器で平底である。1・2の上の覆土中に同図3があり、0段多条LR、RL縄文で縱長の菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文されることから、3は花積下層Ⅰ式期に帰属するだろう。このことから1・2は3と同時期ないし古いものと考えられ、文様などの特徴から、平底の花積下層Ⅰ式土器と思われる。

この他にも本遺跡では、幅の狭い口縁部文様帶に撚糸側面圧痕による文様を持つものが見られるなど、花積下層Ⅰ式土器の特徴を持つものが主体的に出土している。

周辺遺跡の事例として、坪井遺跡ⅡのSK18・35などでも口縁部に撚糸側面圧痕による文様を持つ土器が出土している。とりわけSK35の資料（第13図1）は残存状況も良く、口縁部の内外に撚糸側面圧痕が施文され、体部に縱長菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文される。

**塚田式土器** SI19 第36図5は口縁部に隆帯が巡り、縄文が施される。SI22第48図5も同様で、小波状を呈す。SI25第61図4は口縁部に逆T字状隆帯が明瞭ではないが巡る。ここに挙げた3点とも縄文は2本撚りの縄である。

周辺遺跡の事例として、上述の坪井遺跡ⅡのSK18・35などにも、口縁に隆帯が巡るもののが少量出土しているようである。事業団調査部分の林中原Ⅰ遺跡では、52区1号住居跡から同様の資料が出土している。この住居跡からは器形を窺える資料（第13図2）が出土しており、口縁部に隆帯が巡り砲弾形の器形を呈すと考えられ、塚田式土器であろう。

**花積下層Ⅰ式土器と塚田式土器の特徴を合わせ持つ土器** 第14図1は口縁部に撚糸側面圧痕による文様が施文される。体部には0段多条LR、RL縄文による縱長菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文され、同図2にも共通する。これらは花積下層Ⅰ式土器の文様を持つ。ただし、1のように口縁部に巡る隆帯は塚田式土器の装飾方法であるし、胴の長い器形は塚田式土器の器形要素であり、御代田町塚田遺跡の資料や同町下弥堂遺跡の資料（同図4・5）に類似する。

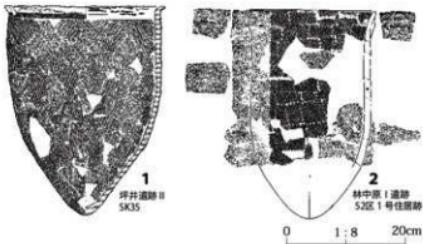
なお同図3の旧東部町鍛冶屋遺跡では口縁部に撚糸側面圧痕による文様を持ち、花積下層Ⅰ式土器の文様である。だが一方で口縁部に刻みを作う隆帯が巡る点は、塚田式土器の装飾方法であろう。

以上のように、花積下層Ⅰ式土器と塚田式土器の特徴を合わせ持つ資料が、吾妻郡西部や東信地域で出土している。両土器型式の分布域が接する、もしくは重なる地域の特徴を示しているのだろう（註1）。

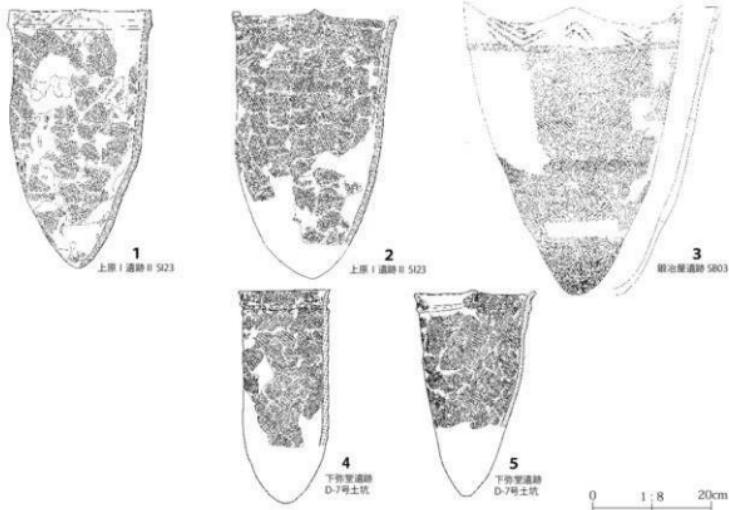
**おわりに** 以上のように本遺跡における前期初頭の土器群は、花積下層Ⅰ式土器を中心に構成され、塚田式土器や両者の特徴を合わせ持つ土器が伴う状況である。なお本遺跡では新しい時期のものも、少量出土してお

り SI25 第 62 図 15 は、幅の広い文様帶に燃糸側面圧痕による渦巻文が重複する花積下層Ⅱ式土器に該当する。同図 2 は肥厚口縁となるが、中道式土器に併存する可能性がある（註 2）。

非常に抽い考察であるが、上原 I 遺跡 II の前期初頭の土器の様相の理解の役に立てれば幸いである。



第13図 周辺遺跡の前期初頭の土器(1/8)



第14図 花積下層Ⅰ式・塚田式土器の両者の特徴を併せ持つ土器と塚田式土器(1/8)

#### 註

- (1) 両者の特徴を合わせ持つ土器が存在する状況については、すでに谷藤氏が述べている（谷藤 2006）。
- (2) 上原 I 遺跡 II では該期の住居跡が接近して 2 列検出され、接近する住居同士は時間差を有する可能性がある。切り合い関係を有する SI25・26 がその事例である。よってここで花積下層Ⅰ式土器とした土器群も、住居単位などで今後細分される可能性があろう。

#### 参考文献

- 東部町教育委員会 1988 「鍛冶屋遺跡」東部町教育委員会  
 御代町教育委員会 1994 「下弥堂遺跡」御代町埋蔵文化財発掘調査報告書 第 17 集  
 長野原町教育委員会 2000 「坪井遺跡Ⅱ」長野原町埋蔵文化財調査報告 第 7 集  
 谷藤保彦 2006 「周辺地域における塚田式土器」『長野県考古学会誌』118 号 長野県考古学会  
 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014 「林中原 I 遺跡・長野原城」八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 43 集

### 第3節 上原II遺跡における中期初頭から前葉の土器

**はじめに** 上原II遺跡の調査では、特に中期初頭の五領ヶ台II式土器が多く出土した。吾妻地域や西毛地域では該期の資料が出土しているものの、群馬県のその他の地域では出土事例が少なく、分布が偏るという特徴がある（註1）。ここでは上原II遺跡の遺構に伴うと考えられる土器を中心に、五領ヶ台II式から阿玉台I式土器を概観する。また上原IV遺跡においてSK12から該期の資料が得られたので、これも合わせて記述する。

なお本文の五領ヶ台式土器の編年観は、今村啓爾氏や山本典幸氏の論考（今村1985、山本2008）を参考にしている。

**土器の出土状況** 本遺跡では竪穴状遺構（SI01・02）や土坑などから土器が出土している。特にSI02や1・2号遺物集中からは多量の土器が出土した。SI02は流れ込みの遺物をごくわずかに確認できた（上原II遺跡第23図3）が、出土遺物は概ね遺構に伴うと言えよう。土坑については埋納されたような状況のものも見受けられた。複数個体の土器が出土した遺構の帰属年代を、他時期の資料の混入や出土状況などを考慮して、まとめるところとなる。SI01・02、SK42は五領ヶ台II式新段階・終末段階である。SK55・56・64は阿玉台I a式期である。この他の遺構は五領ヶ台II式と阿玉台I a式土器が混在する状況であった。

#### 出土土器について

##### 五領ヶ台I式段階（第15図1～3）

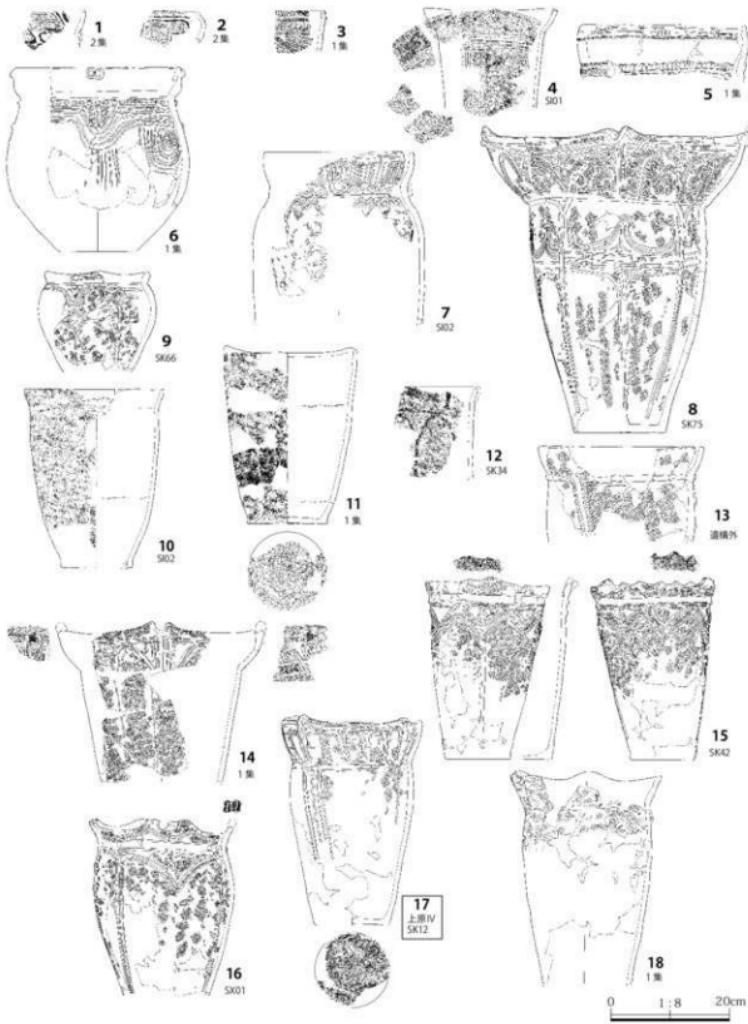
ごく少量出土している。2は更に古くなり前期末葉となる可能性がある。

##### 五領ヶ台II式段階（第15図4～18）

五領ヶ台II式新段階以降の資料が目立ち、古段階に属す資料はほとんど見られなかった。新段階に属すものは4～9である。4～6を見てみると、頸部に沈線を何条も引くもの（4）、圧痕を伴う隆帯を巡らすもの（5・6）がある。体部は懸垂文、渦巻文などが見られる。これらには縄文が施文されない。7～9を見てみると、これらには縄文が施文されており、7・8は3つに文様帯が分かれれる。口縁部は横走沈線、縱位集合沈線（7）、弧線文、玉抱き三叉文などが見られ、体部は懸垂文、弧線文、三叉文、幾何学的な文様、波状文、Y字状の隆帯などが見られる。8は大木7b式に器形が類似する（註2）。ただし、文様モチーフなどは大木7b式に特有なものは使用されておらず、大木7b式の影響を間接的に受けているものの、五領ヶ台II式の範疇に収まる資料と言えよう。ちなみにこの資料は上述の通り文様帯が3つに分かれれる。上から順にキャリバー状の口縁部、体部はY字状の隆帯で縦に四位単位文様帯を区切ったのち横線で上下2段に分かれ、横に3段の文様帯となる。なお、口唇外面には単節RL縄文、それ以下は単節LR・RL縄文が施文される。体部下半は単節LR縄文施文となり縦方向の縄文の帯を志向しているようである。口唇内面に明瞭な稜を持つ。

終末段階に属するものは10～18である。10～12は縄文が施文されていない。このように縄文が施文されないものは、文様があり発達しないようで無文であるものが目立つ。10は正面に楕円状の突起が一単位貼付され、粗いナデで整形され突起の形状が不整形である。12は口縁部から隆帯が垂下し、横位の隆帯に接続する。体部は逆U字状（観察表は□状と記した）の隆帯文様が貼付される。ただしこの文様は盛り上がりが弱く、拓本をとると文様が見やすくなる状況である。

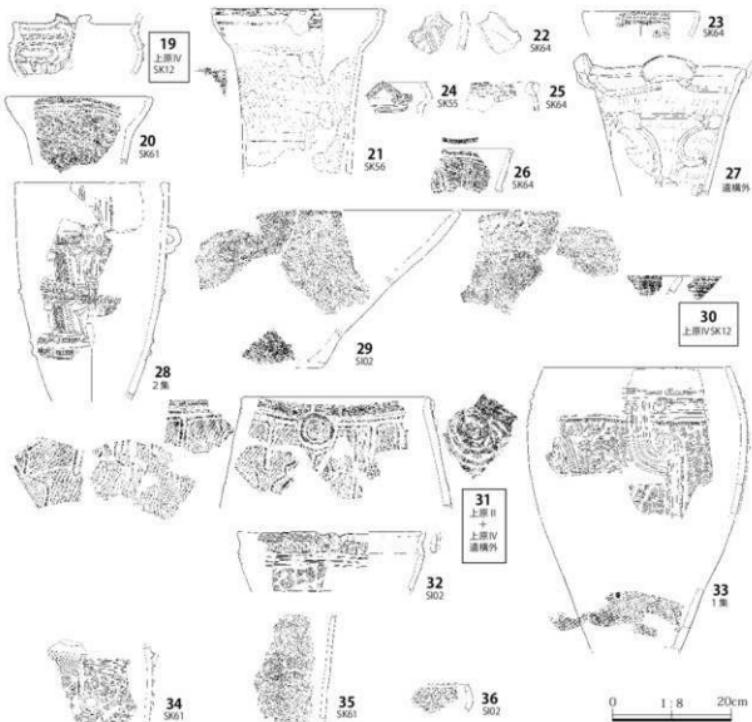
13～18は非対称的な突起がつくもの（15～17）が見られる。13は17と口縁部の形状が似ていることや、口縁部文様が省略されていることから、この段階であると考えた。文様について着目すると、口縁部が無文であるものや（13）、逆U字状の文様が見られる（17）。頸部を画す無文帯が幅狭の長梢円状区画文となるものがある（15）。体部文様が低調になり、体部上位に文様モチーフが集約し（14～16）、懸垂文のみが下位まで及ぶものがある（15・16）。縄文について見てみると、15・16は隆帯上に縄文が施文される。五領ヶ台II式直後あるいは、神谷原式と呼ばれている土器群なども隆帯上に縄文が施文される（註3）。また15～18は縄文が底部にまでは及ばず、途中から無文となる。次の段階の阿玉台式土器や勝坂式土器は縄文施文が低調であることから、地文の無文化が始まっているのかもしれない。



第15図 上原II遺跡中期初頭～前葉の土器群①(1/8)

そして10～18は縄文の有無に関係なく、キャリバー状口縁の内湾が弱くなっている印象を受け、そのためか五領ヶ台II式の特徴である内稜も弱い。調整のナデがやや粗い傾向が特に無文のもので多いようである。阿玉台I a・I b式段階（第16図19～27）

阿玉台I a式土器のみ出土の土坑があるので、それを中心に掲載した。角押文や降帯による文様、部分的に



第16図 上原II遺跡中期初頭～前葉の土器群②(1/8)

鋸歯状となる沈線文や半截竹管による爪形文をめぐらせるものなどが見られる。21は体部にヒダ状圧痕が前面にめぐるが、一部で角押文による文様が施される。また26は17の逆U字形の文様が変化したものと捉えられる。

#### 勝坂式土器（第16図28）

28は勝坂3式土器と思われる。なお上原II遺跡では勝坂式土器は少量の出土である。

#### 浅鉢形土器（第16図29・30）

道構の帰属年代から五領ヶ台II式～阿玉台Ia式に該当する。

#### 異系統の土器（第16図31～36）

31は本遺跡と上原IV遺跡IVで出土した資料で、遺跡間で遺物接合を確認できた例である。いわゆる和泉A遺跡下層土器の変容としてとらえられる（註4）。このことから五領ヶ台I式に併行するものと考えられ、北陸地方ないし北信地域の情報が変容した様子をうかがうことができよう。似たような文様抽出方法を持つ資料について、実見したわけではないが、繩文セミナーの論考を参考にすれば、旧松井田町の新堀東源ヶ原遺跡（以下、文末まで山口2009の図版番号。12図7号埋甕1）・八城二本杉遺跡（22図外1）、富岡市の南蛇井増光寺遺跡（16図1）、そして立馬II遺跡（25図4・7、26図13）が挙げられよう（山口2009）。32は半截竹管の内皮による半隆起線文が施され、頸部に屈曲を持ち、口縁部が開く器形であることから深沢式土器の

可能性が高い（註5）。また、33・34は継手懸垂文が垂下することから深沢式土器もしくは、その影響を受けた資料と考えられる。33は口縁部の横走する隆带上に単節RL繩文が施文される。頸部の半隆起線を挟み、体部や継手懸垂文上にも単節LR繩文が施文される。36は斜行集合沈線文を持つことから東信系土器と考えられる。35は結節繩文が綺麗に施文されることから大木7 b式に該当する可能性がある。

**まとめ** 以上のように本遺跡では五領ヶ台II式でも新しい段階の資料が多い傾向が見られ、五領ヶ台II式期～阿玉台式I-a式期が本遺跡の最盛期と言えよう。なお、小破片のためにここでは掲載しなかつたが、五領ヶ台II式直後の型式といわれる神谷原式・大石式に類似するような角押文が発達するものや、角押文による大柄の三角形区画文が施文される資料も散見する（註6）。

本遺跡をはじめ、付近の五領ヶ台II式期の集落は立馬II遺跡・榎木II遺跡がある。いずれも大字林地内であり、お互いの距離は近いが尾根や沢などで地形は分断される。これら3遺跡は、いずれも吾妻川の最上位河岸段丘上に形成された、斜面崩落土に覆われる扇状地に立地するという共通点を持つ。今後の課題として、なぜ林地内に該期の集落が集中するのか、集落の同時性や集落の遷移ないし人の移動を考えねばならないだろう。

## 註

- (1) 山口逸弘氏の論考から、五領ヶ台I式期は西毛地域に出土事例があり、五領ヶ台II式期から吾妻川流域の資料が加わることが窺える（山口2009）。
- (2) 中野幸大氏のD形に類する（中野2008）。
- (3) 神谷原式・大石式とともに五領ヶ台II c式に後続するものとして、今村啓爾氏が設定された土器型式である（今村1985）。神谷原遺跡は東京都八王子市に、大石遺跡は長野県茅野市にそれぞれ所在する。
- (4) 和泉A遺跡は、新潟県上越市（旧 中頃城郡中郷村）に所在する。和泉A遺跡下層土器は曲隆線を多用する土器で、五領ヶ台I式の後半に概ね併存すると想われる。
- (5) 寺内隆夫氏による一連の論考により設定された土器型式で、長野県飯山市深沢遺跡を標識遺跡とする。継手懸垂文に代表される装飾を持つ。和泉A遺跡下層土器からの系譜を辿ることができる土器型式で、3段階の変遷を氏は考えている。並行關係は2段階が今村啓爾氏の五領ヶ台（II b）～II c式で、1段階と3段階は確定はしていないが、1段階が五領ヶ台II b式、3段階が五領ヶ台II c式～五領ヶ台直後型式段階と想定されている（寺内2006a～d）。
- (6) 神谷原・大石式については註3参照。五領ヶ台直後型式に該当する資料は、上原II遺跡SI02第24図15が挙げられよう。

## 参考文献

- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要4号』
- 寺内隆夫 2006a 「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（1）－縄文時代中期前葉における小地域の土器型式について－」『長野県考古学会誌』111号
- 寺内隆夫 2006b 「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（2）－縄文時代中期前葉における小地域の土器型式について－」『長野県考古学会誌』113号
- 寺内隆夫 2006c 「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（3）－縄文時代中期前葉における小地域の土器型式について－」『長野県考古学会誌』115号
- 寺内隆夫 2006d 「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（4）－縄文時代中期前葉における小地域の土器型式について－」『長野県考古学会誌』116号
- 山本典幸 2008 「五領ヶ台式土器」『総覽 縄文土器』㈱アム・プロモーション
- 中野幸大 2008 「大木7 a～8 b式土器」『総覽 縄文土器』㈱アム・プロモーション
- 山口逸弘 2009 「群馬県における中期初頭の様相－西毛地域を中心にして－」『第22回 縄文セミナー－中期初頭の再検討』縄文セミナーの会

## 第2章 本調査における弥生土器について

**はじめに** 本調査では比較的多くの弥生土器が出土したので、ここで資料を検討したい。また特徴的な資料が出土したので、これについては別項を設けて考えてみた。

**出土資料の分類について** 地文により3つに大別し、その中で系譜や施文方法などで幾つかに細別した（第18図）。加えて周辺遺跡の事例などと比較検討したい。以下に分類内容を示す。

I：条痕文施文のもの。a：東海系（東海地方の条痕文土器の搬入品もしくは忠実な模倣と考えられるもの）、b：東海系以外に細別した。II：縄文施文のもの。a：縄文施文、b：磨消縄文施文のものに細別した。III：無文のもの。ただし文様による分類なので、器種により欠落する分類もある。

**壺形土器** I a類：櫛描波状文（1）、幅太の条痕文・縱位羽状条痕文施文（2）のものが見られる。I b類：中部高地系突尖文（設楽 1995）をもつもの（5）、縱位羽状条痕文（3）、大ぶりな櫛描波状文（4）、半截竹管状工具による条痕文（6）などが施文されるものがある。II a類：外反する口縁部に2条の横走沈線を施文し、棒状工具の押圧とともに出しがによる小波状口縁をもつ（7）、山形沈線文（9）、工字文（変形工字文か）（8）、数条一単位の横走沈線を一定間隔で施文するもの（10・11）がある。III類：体部上半に変形工字文、下半に渦巻文を施文し底部にまで及ぶもの（12）、体部下半にミガキがなされるもの（13）がある。

**甕形土器** I b類：口縁部に沈線が複数施文され、頸部が無文帶となり体部に条痕文を施文（14）、沈線の部分にまで条痕文が及ぶもの（15）、横走沈線が施文され直下に条痕文施文のもの（16）がある。横走沈線を施文する口縁部片（17）は、複数の沈線により文様が描かれる体部片（18）と共に、口縁に無文帶を有し体部上半に沈線による幾何学文様を有する、いわゆる若狭徹氏の甕B（若狭 1992）になると思われる。II a類：複数の沈線による文様を施文するもの（19）がある。II b類：頸部に無文帶をもつもの（20）がある。III類：数条一単位の横位指向の沈線（21）、横走沈線内に赤彩痕跡が残存するもの（22）、山形沈線文（23）が見られる。

**鉢・浅鉢** II a類：変形工字文施文（24）。III類：変形工字文施文（25）。

**筒形土器** 可能性のある資料も挙げた。II b類：重コ字状の文様（26）、徳利状と形容できるもの（27）。

**高环** II a類：変形工字文施文（28）。台部と思われるもの（29）。III類：外部に赤彩痕跡が残存するもの（30）。

**帰属年代について** 小破片が多く、全ての帰属年代を出すのは難しいが可能な限り言及したい。

壺 I a類の1は高崎市上ノ久保遺跡資料（群馬県史編さん委員会 1986：第172図2・3）に類似することから前期と考えられる。この他、文様から壺 I b類の3は前期、5や6は中期と考えられる。壺 II a類の10は類例に安中市原市天王前遺跡資料（新井・小野 1985：第14図）があり栗林式系とされる。よって10は中期に帰属すると思われるが、天王前遺跡資料は鋸歯文や円形浮文が貼付される点で本例とは異なる。壺 III類の12は若狭徹氏の言う東北系短頸壺であろう（若狭 1992・1996）。器形や体部上半に変形工字文を施文する点において藤岡市沖II遺跡資料（藤岡市教育委員会 1986：第12図）に類似し沖式併行の資料と考えられるものの、体部下半から底部にかけての渦巻文は沖II遺跡資料と異なっており、これについては後述する。

甕 I b類の14は縄文時代晚期の浮線文系の要素を残したものと考え、縄文時代晩期末～弥生時代初頭のものとしたい。17・18は上述のように甕Bの範疇に含まれると考えられ、そうであれば沖式に帰属する。なお、類似した口縁部片は他に3点、体部片は9点出土している。

鉢・浅鉢はII～III類ともに藤岡市沖II遺跡資料に類似するものもあり（藤岡市教育委員会 1986：第136図335など）、沖式併行と考えられる。

筒形 II b類の26は小破片であるが、石川日出志氏が神保富士塚式土器（中期中葉とされる）として提示された資料（石川 2003：第3図49）に類例を求める。よって本例も中期に帰属するものとして捉えたい。27は、岩櫃山式～平沢式期とされる安中市原遺跡のD-63号土坑出土土器（安中市史刊行委員会 2001の図249の5）が類例と思われ、27も中期の所産と考えたい。

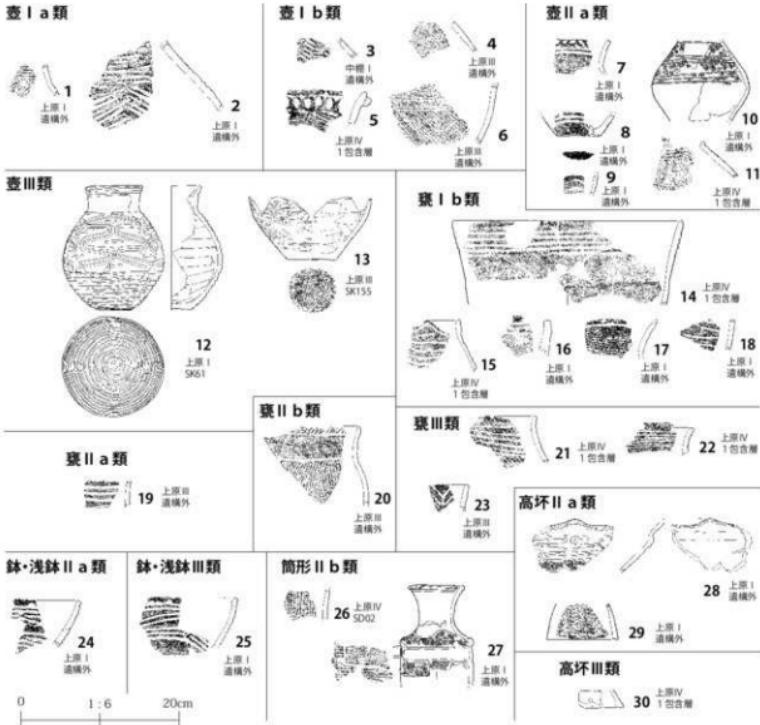
高环 II a類の29は立馬I遺跡で沈線を伴うものが大洞A式とされ、本例も縄文時代晩期に遡る可能性があ

る。高環Ⅲ類は赤彩の雲捲気や端部内面の肥厚、橙色の胎土などから弥生時代後期に帰属する可能性がある。

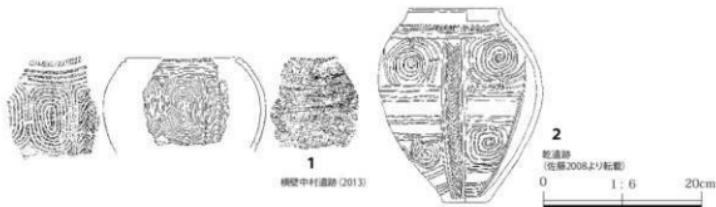
**小結** 本調査で出土した弥生土器は前期から中期前半に該当し、とりわけ沖式併行の資料が多いようである。当地域における前期から中期前半の遺跡として、下原Ⅱ遺跡、三平遺跡、立馬Ⅰ遺跡、坪井遺跡、横壁中村遺跡、尾坂遺跡、外輪原遺Ⅰ遺跡などが挙げられる。今回は当地域において沖式期を中心とする上器群が認められたことの指摘にとどまったが、その系譜を含め更なる資料の検討を要する。

**上原Ⅰ遺跡Ⅱ SK61出土土器について** 本報告で蓋形土器Ⅲ類とした小型壺（第17図12）は、上述のように体部下半から底部に溝巻文を施す資料は見つからなかった。しかし器種を限定しなければ、縄文時代晚期後半以降から蓋形土器や壺形土器に溝巻文を有する事例がある。ここでは近年における蓋形土器・壺形土器の研究史に軽くではあるが触れながら、上原Ⅰ遺跡Ⅱ出土の溝巻文を有する壺形土器（第17図12）について考えてみたい。

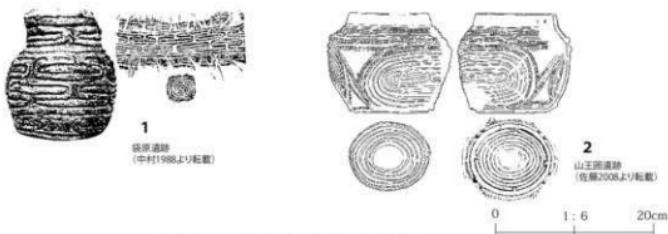
**近年の壺・壺形土器の研究について** 須藤隆氏は縄文時代晚期後半の蓋形土器をとり挙げ、東日本弥生時代の装飾蓋の系譜を検討し、浮線溝巻文広口壺と蓋がセットになる可能性を述べている（須藤2007）。また佐藤祐輔氏は縄文時代晚期後半の蓋形土器の集成を行ったうえで、さらに特殊壺と呼称される壺形土器について関東型・東北型に分類し、蓋との連動性も述べている（註1・佐藤2008）。以上のように蓋形・壺形土器は密接な関係が論じられている。



第17図 本調査における弥生土器の分類(1/6)



第18図 横壁中村遺跡出土の特殊壺とその類例(1/6)



第19図 渦巻文をもつ縄文土器(1/6)



第20図 渦巻文をもつ弥生土器(1/6)



第21図 横壁中村遺跡出土弥生土器(1/6)

**渦巻文を有する土器** 次に渦巻文を有する土器の事例を紹介したい。東北型特殊壺と関連する同心円文と縦位綾杉文を有する特殊壺が、横壁中村遺跡で出土しており（第18図1）、石川県乾遺跡出土資料（同図2）、にも同様のモチーフが認められる。乾遺跡例が弥生時代初頭と考えられることから、横壁中村遺跡例もこれに近い時期に帰属すると考えたい（註2）。底部に渦巻文を持つ縄文土器として、福島県袋原遺跡では頸部と体部に工字文を施し、体部下間に弧文をもつ小型壺が出土している（第19図1）。本例は底面に方形区画に渦巻文が施され、大洞A式土器に比定されている（中村1988）。宮城県山王廻遺跡では楕円形の器形を呈する東北型特殊壺が出土している（同図2）。底部には木目を表現したとも考えられている同心円文をもち、大

洞 A 2 式期のものとされている（註3）。

底部や天井部に渦巻文を持つ弥生土器として、前期では青森県砂沢遺跡で蓋が出土しており（第20図1）、また福島県松ヶ作A遺跡では口縁から体部に変形工字文、体部下半に縄文を施す鉢形土器が出土している（同図2）。松ヶ作A遺跡例は底部に1条の沈線により渦巻文が施されている。

なお、渦巻文が施されているわけではないが、第17図12に後続する可能性のある資料が、横壁中村遺跡から出土し、中期に比定されている（第21図1）。体部下半を欠くが、沈線文が施され磨消縄文を作う。頭部の穿孔は、東北型特殊壺の1つであり注目される（註4）。ただし、穿孔が一箇所のみであることには注意を要する。第17図12は頭部の一部しか残存しておらず、穿孔の有無は不明である。横壁中村遺跡例は同図12よりやや頭部が広いが、口縁と頭部に沈線を施し頭部が無文帯となる点、肩が張らずや橢円を呈する器形などは類似する。ただし同図12は橢円の度合いが横壁中村遺跡例より弱い。

**おわりに** 以上、本遺跡における弥生土器を概観し、更に上原I遺跡II SK61出土土器について、主に渦巻文を有する土器という観點から検討した。縄文時代晚期からの伝統が弥生時代にも続き、東北地方で見られる施文方法を持つ土器が上原I遺跡IIにおいて確認できた。また横壁中村遺跡出土資料（第21図1）は、文様は異なるものの器形や文様帯の位置などに類似した要素があり、上原I遺跡IIのような短頭壺の系統が弥生時代中期にまで続くことを示唆できたと思われる。

#### 註

- (1) 東北型特殊壺は文様構成において蓋と共通性をもち、植物質容器、特に木製容器と密接な関係をもっていた可能性が高い。橢円形を呈する器形が存在する。口縁部に穿孔する例が多く見受けられ、西日本の例から蓋と組み合わせの関係にあった可能性が高いとする。
- (2) 弥生文化が東進すると考えた場合、石川県で弥生時代初頭とすると、関東はまだ縄文時代晚期の可能性もあり乾遺跡例と横壁中村遺跡例を近い時期であるとここでは記した。
- (3) 佐藤前掲。
- (4) なお上ノ久保遺跡出土の小型壺の頭部にも穿孔が認められる（群馬県史編さん委員会 1986：257頁図172-4）。

#### 参考文献

- 新井順二・小野和之 1985 「碓氷川流域における弥生土器の様相」『群馬考古通信』第11号
- 群馬県史編さん委員会 1986 『群馬県史 資料編2』群馬県
- 藤岡市教育委員会 1986 『C11 沖II遺跡』
- 中村五郎 1988 「第四部 蔡内第1様式に並行する東日本の土器」「弥生文化の曙光」未来社
- 若狭 繁 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」「駿台史学」84
- 設楽博己 1995 「東日本における弥生時代の始まり」「考古学研究会40周年記念論文集 展望考古学」
- 若狭 繁 1996 「編年編「群馬県地域」『YAY！弥生土器を語る会20回到達記念論集』
- 安中市史刊行委員会 2001 『安中市史 第四巻』
- 財团法人福島県文化センター 2001 『県道古殿須賀川線（うつくしま未来博開連）遺跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書第384集
- 石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」「土曜考古」第27号
- 須藤 隆 2007 「東日本縄文・弥生時代集落の發展と地域性」東北大大学院文学研究科
- 佐藤祐輔 2008 「縄文時代晚期後半の蓋形土器」『研究紀要』第5号 財團法人山形県埋蔵文化財センター
- 公益財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2013 『横壁中村遺跡（13）－縄文時代の集落－』ハッ場ダム建設工事に伴う理磁文化財発掘調査報告書 第41集
- 公益財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014 『横壁中村遺跡（14）ハッ場ダム建設工事に伴う理磁文化財発掘調査報告書 第44集

### 第3章 古墳時代前期～中期の遺構と遺物について

**はじめに** 今回の林土地改良事業に伴う上原Ⅰ遺跡Ⅱの発掘調査で、これまで長野原町では確認されていなかった古墳時代前期の遺構・遺物が確認され、また同中期の遺構・遺物が出土した。前期の遺物では、東海地方西部系のS字状口縁台付甕（第22図2・3・6、以下S字甕とする）が出土しており、東海地方西部系土器を伴う集団が吾妻川上流域に流入してきたことを示すものと考えられる。検出例がわずかであるが、長野原町内の古墳時代前期・中期の様相を検討してみたい。

**群馬県内および長野県北信・東信地域における弥生時代後期～古墳時代前期の様相** 弥生時代後期～古墳時代前期についてはこれまでに多数の研究がなされてきている。外来系土器の流入や大型古墳の築造など、当時の社会情勢が大きく変動していたことが指摘されており、外来系土器の流入とそれに伴う現象について、田口一郎氏や若狭徹氏らによって研究が進められている。

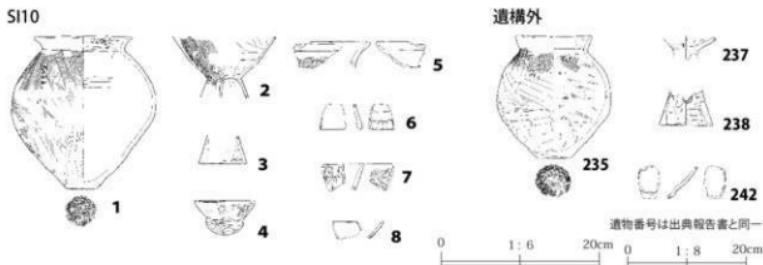
若狭氏は、群馬県内を弥生時代後期の資料が厚く分布する伝統地域（利根川以西の西群馬地域）と、弥生時代を通じて人口が希薄であるが、古墳時代前期に遺跡数が激増する閑散地域・新開地域（利根川以東の東群馬地域）に分け、それぞれをさらに小地域に細分し（注1）、小地域ごとに外来系土器の様相、地域動態について分析を行なっている（若狭2000）。その中で、東海西部系土器は南関東などの多様な系譜を含んで多元的に群馬県内に入り、群馬地域では拠点集落で在来色の一掃を含め急速に土器様式が転換されるほど強い影響を受けた。北陸北東部系土器は北群馬地域に多数流入し、群馬地域と同様、拠点集落の在来色が色褪せるほど強い影響を与えた。また在来土器を作り遺跡が、弥生時代後期には開発対象外であった地域に拡散する現象が認められることは、何らかの圧力を受けた在来集団が伝統地域から移動したことを示している。群馬県地域において、樽式・樽式系土器が払拭され、まったく異なるS字甕を受容し、東海西部系土器を核とした新たな土器様式を成立し得た要因は、大幅な集団再編成の経過を知ることで理解される、とされている。

群馬県地域の弥生時代後期～古墳時代前期の様相は、弥生時代後期では、中部高地系と呼ばれている樽式及び樽式系土器を使用する在地集団が、利根川以西の山間地及びその周辺地域を活動範囲としていたが、古墳時代前期になると、これまで在地集団の活動範囲外であった利根川流域及びその支流域である群馬県南東平野部に、東海西部系・北陸北東部系の外来系土器群を使用する集団が来て開発を行なうようになった。外来集団による新たな地域開発を受け、これまで平野部で開発を行なわなかった在来集団も平野部に移動し、平野部の開発が盛んになったと考えられる。また外来系土器の流入によって、在来系の樽式・樽式系土器が衰退し、東海西部系土器を核とした新たな土器様式が成立し、在地化していった、と考えられる。

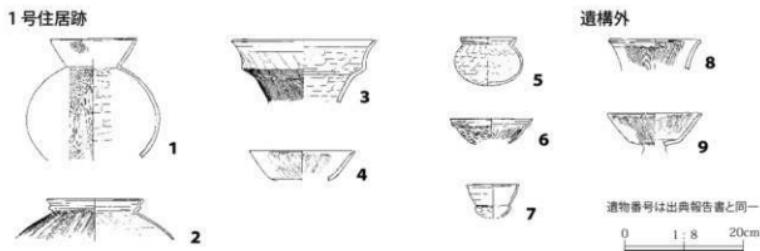
外来系土器の流入・波及経路については、田口一郎氏の研究がある（田口2000）。その中で、「外来系土器のうち、最も大きな存在が伊勢湾系であることは、（略）S字甕の定着と浸透によっても明らかである。そしてその波及ルートとして、伊勢湾地方を起点として、東海地方沿岸から相模湾・東京湾そして、東京低地を介して利根川を遡り北関東西部へ至るルートを想定したい」とある。東海西部系土器群を使用する集団は、東海地方西部地域から太平洋沿岸のルートを伝い東京湾沿岸地域に入り、さらに利根川流域を遡る形で群馬県南東平野部に至ったと考えられる。群馬県内ではS字甕が出土する遺跡は多数確認されているが、そのほとんどが南東平野部に位置しており、本遺跡群の所在する吾妻郡ではほとんど見られない。

前述のように群馬県内における外来系土器の流入は、南関東からの東海西部系が大きな流れであるが、他にも北陸北東部系土器の流入が確認されている。南東平野部北部に位置する渋川市有馬遺跡では、多数の北陸北東部系土器とともにS字甕が出土している（第24図）。「有馬遺跡の位置は、北陸系土器の色濃い影響下にある善光寺平と吾妻川沿いに結ばれており、波及ルートを示している」（田口2000）とあり、北陸北東部系土器が長野県側から南東平野部北側に入るルートが想定される。

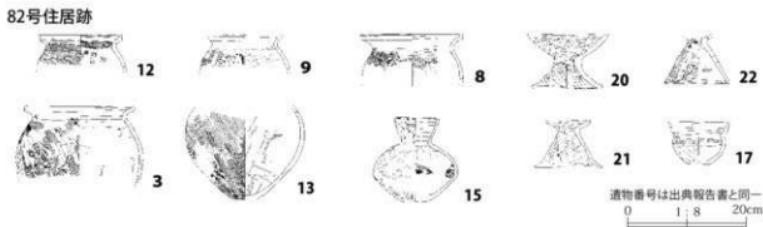
長野県北信地域では、青木一男氏が長野盆地南部（古代更級郡・埴科郡が中核の地域）の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年（北平編年、註2）を設定し（青木1996）、外来系土器の動向と土器様相について研



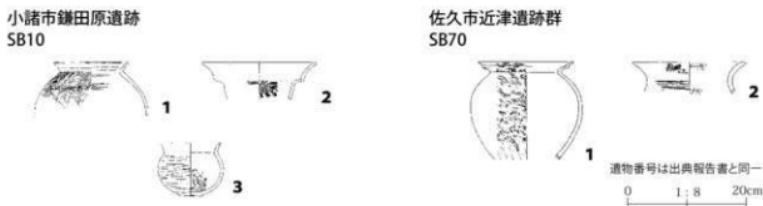
第22図 上原I遺跡II出土の古墳時代前期土器(1/6・1/8)



第23図 東吾妻町宿遺跡出土の古墳時代前期土器(1/8)



第24図 沢川市有馬遺跡82号住居跡出土遺物(1/8)



第25図 小諸市鎌田原遺跡SB10・佐久市近津遺跡群SB70出土遺物(1/8)

究を行なっている（青木 2000）。それによると、弥生時代後期（北平編年3期前半）から北陸北東部系の土器の流入が確認され、弥生時代終末期（同3期後半）には北陸北東部系土器が非常に多くなり、東海西部系土器の流入も始まるようである。古墳時代前期（同4期）になると東海西部系土器が多量に出土するようになり、S字彫C類（赤塚分類、註3）以降のS字彫が流入して、S字彫・台付彫が定着した様相は認められないようである。

東信地域の佐久市・小諸市で弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡が多数調査されており、B・C類以降のS字彫が出土している（第25図）。台付彫も若干出土するが、S字彫・台付彫が定着した様相は認められない。

**吾妻郡における古墳時代前期遺跡の様相** 吾妻郡内で確認された古墳時代前期の遺跡は、第26図で示した11遺跡がある。吾妻川中流域の中之条町・東吾妻町に集中し、そこから西側に離れた山間部に近い吾妻川上流域に上原I遺跡II、吾妻川支流の温川流域に宿遺跡がある。上原I遺跡IIと宿遺跡からはS字彫が出土しており、そのほか上原I遺跡IIでは、壺、折り返し口縁彫、埠が出土し（第22図）、宿遺跡では壺、有段口縁壺、小型壺・高杯・屈曲口縁鉢・埠が出土している（第23図）。外来系遺物は、上原I遺跡IIでは東海西部系のS字彫と畿内系の小型精製土器があるが客体的である。宿遺跡では東海西部系のS字彫と高杯、畿内系の小型精製土器があり、やや主体的である。

東海西部系土器の流入以降の土器様相は、前述のとおり群馬県南東平野部においてはS字彫が在地化し、台付彫も定着する。南東平野部北側では拠点集落においてS字彫を受け入れつつ北陸北東部系土器が主体的となっている。長野県北信・東信地域では在地の土器が影響を受け変容していくもののS字彫が定着せず、台付彫も受け入れていない状況である。上原I遺跡IIでは、S字彫が複数個体出土しているが、台付彫は出土しておらず、長野県北信・東信地域の様相に近い。また、南東平野部北側との間の地域にS字彫が出土する遺跡が確認されていない。このような状況から、上原I遺跡IIで出土したS字彫は、北陸東部系土器が長野県北信・東信地域から群馬県平野部に流入する過程でもたらされたものである可能性が高いと考えられる。

**長野原町域における古墳時代前期・中期の様相** 上原I遺跡IIが立地する林地区の最上位段丘面では、林宮原遺跡VIIで古墳時代後期の堅穴住居跡、林中原II遺跡で弥生時代前期～中期の堅穴住居跡・土坑が確認されている。今回の土地改良事業に伴う発掘調査で、上原I遺跡IIから古墳時代前期の堅穴住居跡と中期の土坑、弥生時代前期の遺構・遺物及び前期～中期の遺物が、上原IV遺跡IVから古墳時代後期の堅穴住居跡が確認された。このことから、この段丘面上では弥生時代にも小規模ながら集落が営まれ、場所を移動しつつ古墳時代にも小規模集団が生活していたものと考えられる。上原I遺跡IIから東海西部系の土器が出土している状況は、この



第26図 吾妻郡の古墳時代前期の遺跡(1/200,000)

時期にも外部から人または物が移動してきたことを物語っている。古墳時代前期以前から長野原地域に居た人々とどのような関係性であったかは、確認された古墳時代前期の資料が少ないと判断しない。

**おわりに** 今回、上原 I 遺跡Ⅱにおいて古墳時代前期・中期の遺構・遺物が出土したことで、長野原町における古墳時代の様相がわざながら新たに確認することができた。しかしながら、確認された遺構が少なく、一つの段丘面上だけであることから、全体的に該期の様相を把握するまでは至らなかった。林地区の段丘面以外にも弥生時代の遺構が確認されている状況（註4）から、古墳時代前期の遺構が他にも存在する可能性は高いと考えられる。また、今回の林土地改良事業で発掘調査を行なった遺跡からは、古くは繩文時代早期・前期・中期・古墳時代以降では平安時代においても長野原地域との関わりを示す遺物が出土していることから、長野原町を含む西吾妻地域は継続的に長野原地域との交流があったものと考えられる。

## 註

- (1) 伝統地域は 6 地域、閑散地域・新聞地域は 4 地域に分け、現在の郡名を使用している。伝統地域は、群馬地域、碓氷地域、北群馬地域、甘楽地域、利根地域、吾妻地域で、閑散地域・新聞地域は勢多地域、佐波北部地域、佐波南部地域、新田地域である。
- (2) 弥生時代後期～古墳時代前期を 6 期に時期区分し、1～3 期を弥生時代後期、4～6 期を古墳時代前期としている。1～3 期は、中部高地型櫛描文盛行の時代で、3 期を箱清水式土器様式の定着・盛行期としている。4 期は中部高地型櫛描文土器群に北陸系・東海系土器群の共伴が顕著になる。5 期は中部高地型櫛描文土器群の終焉と転換、6 期は屈折彎高杯の定着と盛行に画期を求めている。群馬県の若狭編年（1990）とは、北平編年 1～3 期が傳式 1～3 期、北平編年 4 期が傳式系 1 段階・2 段階、北平編年 5 期が傳式系 3 段階と対応する。
- (3) S 字甕は赤塚次郎氏によって「廻間遺跡」において形態分類が行なわれており、S 字甕分類の基準となっている。古い物から順に 0 類・A 類・B 類・C 類・D 類の 5 つに大別される。0 類は口縁部 2 段が外反し、外面に刺突文を施すもので、初源的なものである。A 類は口縁部 2 段が垂直に立ち上がり、外面は押引刺突文に変化する。B 類は口縁部 2 段が垂直に立ち上がり、端部に明瞭な面を持つ。外面の刺突文は省略され、台端部の折り返しが明瞭化する。C 類は口縁部 2 段が大きく外反し、端部の面取りが省略される。頸部調整を行い、一条の沈線が巡る。D 類は口縁部形態が崩れ、端部に肥厚した明瞭な面を持つ。
- (4) 横壁中村遺跡・尾坂遺跡・立馬 I 遺跡で弥生時代前期～中期の堅穴住居跡・再葬墓か・土坑などが確認されている。

## 引用・参考文献

- 青木 一男 1996 「第2部 第2章 第1節 5まとめ」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 一長野市内その5－大星山古墳群・北平1号墳』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 20
- 2000 「中部高地型甕と外来系土器の動向」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム
- 赤塚 次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 田口 一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム
- 若狭 繁 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』I 群馬土器観会
- 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」「人が動く・土器も動く」かみつけの里博物館
- 2000 「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態－群馬県地域の場合－」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム
- 群馬県吾妻郡吾妻町教育委員会 1993 『宿遷跡』
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『有馬遺跡II 弥生・古墳時代編』一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集-《本文編》
- (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 2013 『鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群』中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 小諸市内・佐久市内 1-

## 第4章 平安時代の遺構と遺物

### 第1節 本調査における出土遺物および竪穴住居跡の変遷

**はじめに** 今回の林土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査では、平安時代の竪穴住居跡は4遺跡から33軒が確認された。9世紀中葉まで遡るとと思われるものもあるが、ほぼ全てが9世紀後半～10世紀前半というおよそ60～70年間という時間幅で営まれている。確認された竪穴住居跡の諸要素（属性）・出土遺物を分析することによって本調査遺跡における変遷を辿りたい。

**本調査で確認された平安時代の出土遺物および竪穴住居跡** 上原II遺跡では確認されていない。上原III遺跡では14軒確認され、その内1軒は鍛冶工房跡である。「長」の墨書き土器、灰釉陶器が多数出土している。SI03はカマド・遺物が確認されていないため、今回の分析対象からは除外した。中棚I遺跡では4軒確認された。特大型の竪穴住居跡があり、「赤」の墨書き土器、灰釉陶器が多量出土している。また、近接する榎木II遺跡でも出土している、「三家」の墨書き土器が出土している。上原I遺跡IIでは11軒、上原IV遺跡IVでは4軒確認され、林中原I遺跡X、林中原II遺跡Xでは確認されていない。

**本調査における平安時代の土器の様相** 竪穴住居跡から出土した土器は、9世紀中葉～10世紀前半の土師器（土師質土器・内黒土器含む）、須恵器、灰釉陶器である（註1）。土師器は、コの字状口縁甕、次節で扱う「在地系甕」、小型のコの字状口縁甕・ロクロ甕がある。土師器は1点のみである。ナデ調整・底部手持ちヘラケズリで、「麻呂」または「麿」と墨書きされる。長野原町を含め吾妻郡内では、9世紀以降に土師器はほとんど出土しない傾向にあるため、外部から持ち込まれた可能性が高い。土師質土器・内黒土器は壺・塊が出土している。ロクロ整形で、壺は底部にヘラケズリを施す。群馬県内の土師器生産集団がロクロを使用していないと考えると、土師質土器と小型ロクロ甕は吾妻郡内の土師器の系統から外れるものと考えられる。須恵器は甕・壺・羽釜・壺・塊・小型壺・皿・耳皿が確認された。甕・壺は小破片のため今回の変遷には使用していない。羽釜は月夜野型と吉井型の2種類が出土し、1軒の住居跡で共存する。出土量は月夜野型が圧倒的に多い。壺・塊は底径が大きく浅いもの、底径が小さく深いものが存在する。灰釉陶器は碗・皿・耳皿が出土している。光ヶ丘1号窯式期と大原2号窯式期があり、大半が大原2号窯式期である。

出土した土器はI期～III期の3段階に分類した（第27図）。I期は明瞭な屈曲を持つコの字状口縁甕を指標とした。須恵器壺・塊は底径が大きく浅いものが該当するが、II期との明確な違いは指摘できない。コの字状口縁甕と共に作るものを示した。II期は若干崩れたコの字状口縁甕、底径が大きく浅い須恵器壺・塊、灰釉陶器（光ヶ丘1号窯式期）を指標とした。小型ロクロ甕が該期から出現し、共存遺物によって区分した。内黒土器・須恵器皿・耳皿は共存遺物から判断し該期に示した。III期は大きく崩れたコの字状口縁甕、「在地系甕」、羽釜、底径が小さく深い須恵器壺・塊、灰釉陶器（大原2号窯式期）を指標とした。土師質土器・内黒土器は共存遺物から該期と判断した。羽釜は月夜野型で縫の付く部分からの口縁部形態に違いがあることから、2段階に分かれる可能性がある（註2）。小型ロクロ甕・須恵器小型壺・耳皿は共存遺物から該期に示した。I期は9世紀中葉、II期は9世紀後半、III期は10世紀前半に比定し、それぞれ中沢悟氏の土器編年（中沢2009）の平安時代第2段階前半、同後半、平安時代第3段階に相当する。

**竪穴住居跡の時期区分基準** 屈曲のしっかりしたコの字状口縁甕、底径が大きく浅い須恵器壺のみが出土した中棚I遺跡1号・3号竪穴住居跡をI期とした。羽釜・灰釉陶器（大原2号窯式期）が出土する、または底径が小さく深い須恵器壺のみが出土する竪穴住居跡をIII期とし、それ以外の竪穴住居跡をII期とした（第28図）。

**竪穴住居跡の分類** 竪穴住居跡を、確認された柱穴の位置で分類を試みた。壁柱穴（壁際の柱穴を含む）のみを持つものをAとし、柱穴数の多いものをI、少ないものをIIに細分した。壁柱穴と屋内柱穴を持つものをBとした。屋内柱穴のみを持つものをCとし、4本柱をI、1～3本柱をIIに細分した。柱穴を持たないもの

図27 本調査における平安時代土器変遷図(1/12)

※キャブションは道路名住居番号一連の番号を示す。

		B:壁柱穴と 屋内柱穴			C:屋 内 柱 穴			D:柱穴を持たない		
		1. 多 い	II.少 ない		1. 4 本	II. 1 ~ 3 本				
I 期	A:壁 柱 穴									
	B:壁柱穴と 屋内柱穴									
	C:屋 内 柱 穴									
	D:柱穴を持たない									
	I 期									
	II 期									
III 期	A:壁 柱 穴									
	B:壁柱穴と 屋内柱穴									
	C:屋 内 柱 穴									
	D:柱穴を持たない									
	I 期									
	II 期									

第28図 本調査のにおける平安時代壁柱穴変遷図(1/300)

※キャラクションは地名を示す。

第11表 本調査の平安時代豎穴住居諸属性一覧表

遺跡名	遺構名	長軸方向	規模	面積 (m <sup>2</sup> )	柱種	配置	カマド		遺物					備考	時期	
							位置	構築方法	灰輪	墨書き	内里	羽釜	鉄製品	銅鏡		
上原Ⅲ遺跡	S101	N-33° E	中	8.16	A II	南東隅 不明	○	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S103	N-90°	中	(7.50)	C II	—	○	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S104	N-39° E	大	24.05	D	北壁	石組・ 土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S105	N-40° E	中	19.99	D	北→北壁	石組・ 土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S108	N-82° E	中	14.77	C I	東壁	土で造成、石組か	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S109	N-32° W	小	10.23	B	北壁	土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S110	N-70° E	大	(20.77)	A I	東壁	土で造成	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	
	S111	N-35° W	中	<16.26>	A 2	北壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S112	N-89° E	大	(25.60)	A 3	東壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	
	S113	N-67° E	中	<10.49>	B	北→北壁	土で造成、石組か	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S114	N-90°	大	(22.03)	C II	東壁	土で造成、石組か	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	
	S115 A	N-43° E	小	10.57	C II	東壁	土で造成	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	
	S115 B	N-48° W	小	9.63	C II	北壁	土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S116	N-75° E	中	(13.71)	D	東壁	土で造成、石組か	○	○	○	○	○	○	○	III期	
中棚Ⅰ遺跡	S101	—	大	(6.23)	A B か	不明	石組か	○	○	○	○	○	○	○	「三家」「人」 「三家」「人」	I期
	S102	N-15° E	特大	(14.01)	B	北壁	不明	○	○	○	○	○	○	○	「三家」「人」 「人」	II期
	S103	N-51° W	特大	(35.30)	B	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	「赤」 「赤」	II期
	S104	N-64° W	特大	29.89	B	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	「赤」 「赤」	II期
上原Ⅰ遺跡	S104	N-80° W	小	(8.79)	C II	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S105	N-60° W	中	(10.37)	D	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S108	N-57° W	中	11.11	D	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	III期
	S109 A	N-87° E	中	(9.86)	A II	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
	S109 B	N-87° E	中	(7.78)	D	南壁	不明	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	III期
	S111	N-11° E	小	(6.75)	D	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S113	N-72° E	中	(9.92)	C II	東壁	堆山掘り残し	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S114	N-3° E	中	<14.23>	A II	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	他地域(東信か) あり	III期
	S115	N-30° E	小	(6.27)	A II	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S116	N-10° E	中	(9.43)	C II	東→北壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	III期
	S117	N-23° E	大	<15.53>	A II	東壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	III期	
上原Ⅳ遺跡	S102	N-85° E	中	12.44	C I	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	
	S103	N-82° E	小	11.61	C II	南壁	不明	○	○	○	○	○	○	○	小型ロクロ窯	III期
	S104	N-14° W	小	6.22	A II	南壁	石組・土で造成	○	○	○	○	○	○	○	他地域(東信か) あり	III期
	S106	N-89° W	小	10.01	D	南壁	土で造成	○	○	○	○	○	○	○	II期	

をDとした。変化し得る要素として規模とカマド位置が考えられる。規模は『矢田遺跡VII』の豎穴住居跡規模の基準を参考に一辻6m以上を特大、5m以上~6m未満を大、4m以上~5m未満を中、4m未満を小とした(註3)。カマドは北カマド、東カマド、南カマドの3種類が存在する(第28図・第11表)。

**時期別の豎穴住居跡の傾向** 柱穴位置による分類から見られる特徴 I期は、遺構数が少ないため傾向は不確定だが、A IIとBが確認された。II期はA II以外の全てが確認された。C IIが5軒と多く、他は1~3軒である。III期は全ての形態が確認された。A IIとDが4~5軒と増加し、その他は1~2軒である。規模による分類から見られる特徴 特大型は中棚Ⅰ遺跡のみが確認された。遺構数が少ないため傾向は不明である。I期~II期で確認され、III期では見られない。大~小型はI期~III期で確認され、中・小型の豎穴住居跡がII期で67%、III期で83%を占めるようになる。カマド位置による分類から見られる特徴 I期は東カマドのみであるが、遺構数が少ないとある。II期は東カマドと北カマドが存在し、北カマド2軒、東カマド10軒で大半が東カマドである。III期には南カマドが出現し、北カマドが増加する。比率は北カマド6軒33%、東カマド8軒45%、南カマド4軒22%である。南カマドが確認されたのは上原Ⅰ遺跡IIと上原Ⅳ遺跡IVである。

**林地区における9世紀中葉から10世紀前半の豎穴住居跡の様相** 今回発掘調査を行なった7遺跡のうち、4遺跡から確認された32軒の平安時代の豎穴住居跡の傾向を概観すると、以下のことが確認された。柱穴位置 II期でC IIが、III期でA IIとDが多くなるが、各遺跡内において偏った傾向は見られなかった。集落によつて柱穴位置を統一している様相は見られない。規模 特大型がII期まで確認されるが、III期では見られない。大型がIII期でも確認されるものの数が少なく、豎穴住居跡の小型化が進むと考えられる。一辻6m超の特大型は、同時期の県内平野部では皆見に触ることができないため確かであるが、同時期の県内平野部ではあまり見られないと思われる。しかしながら、本調査遺跡と同じ段丘上の林宮原遺跡や別段丘にある榎木II遺跡、横壁中村遺跡などでも数軒確認されていることから、長野原地域における特徴の1つと言えよう。大型は

上原Ⅲ遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡Ⅱで確認されるが、上原Ⅰ遺跡Ⅱの竪穴住居跡は隅丸長方形であるため面積的には他のものよりも小さい。よって大型は中棚Ⅰ遺跡と上原Ⅲ遺跡に限られる。カマド位置Ⅱ期では東カマドが主体で北カマドがわずかに確認されている。Ⅲ期になると南カマドが出現し、北カマドも増加する傾向が見られた。一例であるが、南カマドの竪穴住居跡は古墳時代～平安時代にかけての大集落である高崎市（旧吉井町）矢田遺跡では確認されていない。長野原地域に見られる特徴の1つであろうか。南東隅部にカマドを有する竪穴住居跡が存在していることから、南カマドはそこから派生したものと考えられる。出土遺物 灰釉陶器・墨書き土器の出土量が遺跡によって異なることが確認された。上原Ⅲ遺跡、中棚Ⅰ遺跡では多数の竪穴住居跡から多量に出土し、遺存度の高いものが多い。上原Ⅰ遺跡Ⅱ、上原Ⅳ遺跡Ⅳは出土遺構・出土量が少なく、破片資料がほとんどである。大型の竪穴住居跡の確認状況と合わせて、上原Ⅲ遺跡と中棚Ⅰ遺跡は有力な集団の集落であったと推測される。また、県内のものは胎土・調整方法が異なる遺物（上Ⅰ 14-1・上Ⅳ 04-2・3）が出土しており、形態は長野原東信地域のものと類似していると思われる。また長野原県域で一般的に使用されている小型ロクロ壺や内面黒色処理を施した壺・塊が4遺跡すべてから出土している。これらの遺物から長野原町地域では長野原県地域との交流があったものと推測される。

**おわりに** 今回の林土地改良事業に伴って1つの段丘面上で大規模に発掘調査を行なったことで、9世紀中葉～10世紀前半の集落を広範囲にわたって確認することができ、林地区のある段丘面の一部分ではあるが集落の様相を知ることができた。この段丘上では、上原Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ遺跡ほか複数箇所に同時に集落が形成されていたと推測される。中棚Ⅰ遺跡は上原Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ遺跡がある段丘面とは離れた場所にあることから、近在する榆木Ⅰ・Ⅱ遺跡との集落域になると思われる。長野原産と考えられる壺、長野原地域との関わりを示す小型ロクロ壺や内面黒色処理を施した壺・塊が出土していることから、当地域は長野原県地域との交流が行なわれていた地域と考えられる。今回の事業地内の遺跡のみを対象としたが、同じ段丘上の林宮原遺跡、さらには他の段丘面の集落遺跡にも広げることで、より詳しい様相を知る手掛かりとなると思われる。

#### 註

- (1) 土師器・須恵器の分類は、基本的に『山岸Ⅱ遺跡』における長野原町教育委員会の方針を踏襲している。しかし、ロクロ整形で酸化焰焼成のものを土師質土器とし、土師器内で細分した。内面に黒色処理を施したものを内黒土器と表記した。
- (2) 銛の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がるるもの（第1段階）と、多少の変化は認められるものの全体的に内湾しつ直立気味に立ち上がるもの（第2段階）がある（中沢1986）。
- (3) 「矢田遺跡Ⅶ」の「第7章第1節 古墳～平安時代の住居について」では、床面積で住居規模を小規模～特大規模の4つに分類している。今回は、床面積を算出できない竪穴住居跡があることから一辺の長さに置き換え分類した。

#### 引用・参考文献

- 神谷 佳明 2008 「第4章第4節 榆木Ⅱ遺跡出土の灰釉陶器について」『榆木Ⅱ遺跡（1）（平安時代・中世後編）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省
- 桜岡 正信 2003 「武藏慶について—上野地域の生産と流通—」『高崎市史研究17』高崎市市史編さん専門委員会
- 富田 孝彦 2013 「第4章 調査の成果と課題」『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 中沢 恒 1986 「第6章第3節 月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡 一般国道17号線（月夜野ハイバス）改築工事に伴う理蔵文化財発掘調査報告書－III－』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1997 「第7章第1節 古墳～平安時代の住居について」『矢田遺跡Ⅶ 古墳時代住居路編（4）奈良時代編平安時代住居路編（4）』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団
- 2009 「第5章2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について」『細谷B遺跡』一般県道岩下線道路改築事業に伴う理蔵文化財発掘調査報告書（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団
- 長野原町佐久郡臼田町教育委員会 1993 「宮東・大工原遺跡－平安時代小冶治集落の調査－」臼田町埋蔵文化財調査報告書第7集

## 第2節 西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」について

**はじめに** 西吾妻地域（注1）、とりわけ長野原町における古代集落は、9世紀中頃以降、後半～10世紀前半を主体として存在することが知られている。ここからの出土遺物を大局的にみれば、主に土器類を中心として、同時期の群馬県内の様相と極端な差は見出しがたいようである。土師器甕についてみれば、県内において普遍的に出土するのは武藏型甕であり、本報告書ではコの字状口縁甕と表現している甕である。これは西吾妻地域からも一般的に出土する土師器甕であるが、近年の長野原町内を主体とする発掘調査事例の増加により、コの字状口縁甕とは雾気の違う資料の存在が指摘され始めている。これが西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」とよばれる土師器甕である。

今回、本遺跡群の資料整理を進める中で、「在地系甕」に相当すると考えられる資料が認められた。そこで、本節ではこれまでに指摘されている「在地系甕」の内容について概観した上で、本遺跡群出土資料を集成して示す。さらに他遺跡出土資料の中にも「在地系甕」の可能性のある資料が認められたことから、それらの一部を示すとともに、「在地系甕」を把握するための展望をしたい。

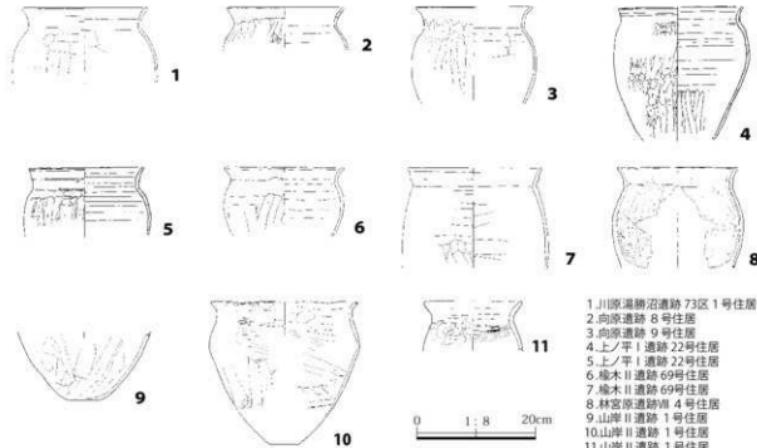
**西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」とは** コの字状口縁甕と様相の異なる甕が存在することは、関俊明氏による川原湯勝沼遺跡の報告書中で指摘されていた（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005）。これは73区1号住居からの出土として掲載された土器群中の1点であり、「白色味が強い胎土と縦方向のヘラ削りが上位まで及んでいること」を特徴とする（第29図1）。その後群馬県北部、北毛地域における奈良・平安時代の土器様相についてまとめた中沢悟氏は、「平野部で多く見られるコの字状口縁の甕と同時に異なる甕が東吾妻町や長野原町では存在するようである」と述べ、「コの字状口縁の甕と胎土や色は近いが、器形がやや異なり、コの字状口縁の甕は、肩部に横方向のヘラ削りを持つが、この削りが、縦方向で、胴部から頸部まで及んでいるものが多いようである」と説明した。と同時に「県央部と共通するコの字状口縁の甕と似ているが胎土や整形方法の異なる甕」とも述べられ、コの字状口縁甕とは胎土に違いがあることも示唆された（中沢 2009）。こうした中沢氏の指摘の後、富田孝彦氏は林宮原Ⅱ遺跡の報告書中で豊穴住居跡S104出土資料としてコの字状口縁甕と併存する縦位ケズリ調整の甕を報告し（第29図8）、「在地的な類型」として捉えられる可能性を示した（長野原町教育委員会 2012）。さらに富田氏は山岸Ⅱ遺跡の報告書中で、豊穴住居跡S101出土の土師器甕の中には「平野部の規格化された甕とは胎土や整形方法で異なっている」資料が存在することを報告し、「これらはいずれも規格外の特徴を有しており、在地化したもの」と考えられた（第29図9～11）。併せて西吾妻地域で出土した「在地系甕」を集成して提示し（第29図2～8）、「平野部で出土する規格化されたコの字状口縁甕を模倣した在地系土器の存在」を確認している。この集成図には中沢氏が前掲文中で指摘した資料も包括され、ここにおいて「在地系甕」として類別が示されることとなった（長野原町教育委員会 2013）。

以上をまとめれば、西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」の特徴として、コの字状口縁甕に対して次のような違いが挙げられる。

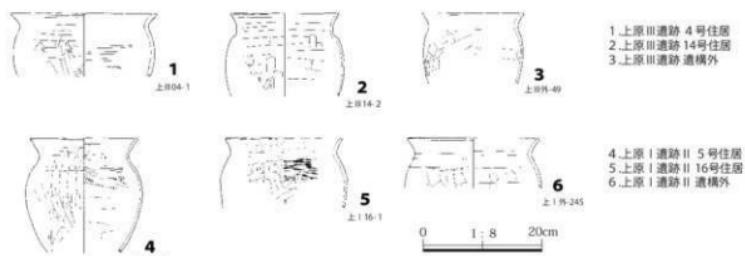
- 器形の違い。県内で出土するコの字状口縁甕とは器形がやや異なる。
- 整形方法の違い。コの字状口縁甕が肩部に横方向のヘラケズリをもつてのに対し、肩部のヘラケズリが縦方向のもの。この縦位ヘラケズリは、胴部から頸部に及んでいるものが多いようである。また実測図の観察からは、縦位ヘラケズリが肩部まで及ばないものは、肩部に横位のナデ痕跡を残すように見える。
- 可能性としての胎土の違い。胎土については不明な点があるが、白色味が強い胎土の資料が存在する。

コの字状口縁甕に対しての違いは、上記の全てが該当するもの、あるいはその一部のみ該当するものがあるようだ。そして「在地系甕」を定義付けるには未だ抽象的なきらいがあるが、このような観点から本遺跡群出土資料を検討した結果、いくつかの「在地系甕」を把握するに至った。

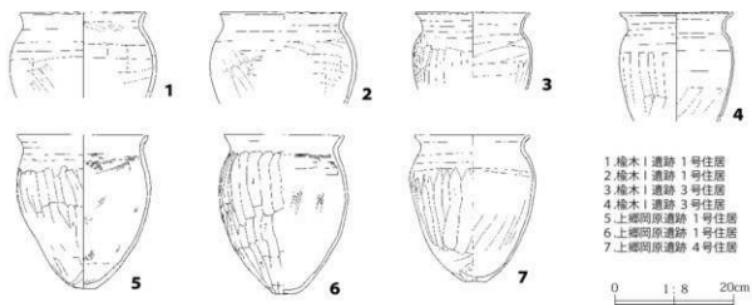
**本遺跡群出土の「在地系甕」** 今回調査した遺跡群の中で、平安時代に相当する豊穴住居跡を検出したのは



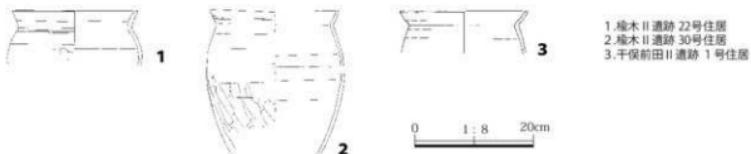
第29図 西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」(1/8)



第30図 本調査出土の「在地系甕」(1/8)



第31図 他遺跡出土の「在地系甕」(1/8)



第32図 西吾妻地域出土のロクロ窓(1/8)

7遺跡中4遺跡である。具体的には中棚I遺跡・上原Ⅲ遺跡・上原I遺跡II・上原IV遺跡IVの各遺跡であり、これらの集落は9世紀中頃以降、9世紀後半～10世紀前半を時期的主体とする。この傾向はこれまでの長野原町内での調査成果と一致をみる。本遺跡群からの出土遺物の中で、「在地系窓」として本報告書に掲載したのは合計7点、上原Ⅲ遺跡の3点と上原I遺跡IIからの4点である。中棚I遺跡や上原IV遺跡IVからも「在地系窓」の可能性のある資料を確認しているが、小破片であるがゆえに不明瞭な部分があり、今回は非掲載としている。

本報告書に掲載した「在地系窓」の中から、ある程度器形を知りえる6点の資料を集成したのが第30図である（註2）。上原Ⅲ遺跡・上原I遺跡IIとともに、それぞれ竪穴住居跡出土の2点、遺構外出土として扱った1点を図示した。竪穴住居跡出土の計4点は、本章第1節によれば9世紀後半～10世紀前半の帰属として把握している。

図示した資料では口縁部から底部まで、全形を復元できる資料は皆無で、全て体部上半に相当する破片資料である。各資料の詳細は本報告書掲載の遺物観察表に依られたいが、全体的に概観すればコの字状口縁窓とは器形が異なる。外面の調整方法では、第30図4や5のように、肩部から頸部、あるいは頸部直下まで縦位の調整が施される。5は粗い縦位のヘラケズリである。4はヘラケズリというよりも、縦位ヘラナデと判断した弱めの調整痕である。従来「在地系窓」の特徴として、肩部への縦位ヘラケズリが指摘されていたが、縦位ヘラナデの資料も存在すると考えられる。一方で第30図1・2・6では体部に縦位主体の調整痕が認められるが、肩部には及ばない。1と2はヘラナデ、6がヘラケズリと観察している。これら3点にはいずれも肩部に横位のナデ調整が残され、2についてはヘラナデと判断した。なお、1についてロクロ窓である可能性も考えている。3は体部に縦斜位ヘラケズリを施し、連続して肩部では横斜位ヘラケズリになる。コの字状口縁窓の調整に近い印象を受けるが、口縁部形態に違いがあり、白色味のある色調が特徴の資料である。

**周辺遺跡からの出土例** 前述したように、西吾妻地域の「在地系窓」は富田氏によって集成されている。今回当地域に関わる発掘調査報告書を確認したところ、富田氏の集成資料に加えて、「在地系窓」の可能性のある資料をいくつか見出した。これには吾妻渓谷の東側の地域、東吾妻町の遺跡から出土した資料も含めており、中沢氏によってすでに示された資料もある（註3）。「在地系窓」と判断するにあたっては、全て報告書掲載の実測図の観察に依り、直接的に資料を実見したものは無い。そのため現段階では検討資料としての可能性の提示に留まる。第31図はそれらの一部を集成したものである。コの字状口縁窓とは異なる器形、肩部から頸部の縦位ヘラケズリ、あるいは胴部の縦位ヘラケズリと肩部の横位ナデなど、今のところ「在地系窓」の特徴としてとらえられよう。

**今後に向けて** 現在、「在地系窓」はコの字状口縁窓が在地化したものとの見方がある。一方で、同時期の西吾妻地域では榆木II遺跡や千俣前田II遺跡などで大型ロクロ窓の存在を認めることができ（註4・第32図）、非掲載ながら、小破片レベルでは本遺跡群からの出土も確認している（註5）。隣接する長野県上田・佐久地域などの東信地域では、9世紀以降ロクロ窓たる北信型窓が出現し（註6・小林1989）、後半には主体的になっていくようだ。同時期の西吾妻地域には、この地域を介在して、客体的ながらも一定量の北信型窓が存在する可能性がある。そうであれば、「在地系窓」の存在に東信地域経由の北信型窓の影響は認められないのか、あるいは「在地系窓」として把握される資料の中にそれそのものはないのか、注意して観察する必要が

ある。ロクロ甕との関連性で言えば、今回「在地系甕」に含めた「肩部横位ナデ、胴部縦位ヘラケズリ」の資料には注目しておきたい。肩部を含めた頸部付近まで縦位ヘラケズリ（あるいはヘラナデ）が及ぶ一群とは分けられる可能性があり、これらがロクロ甕そのものであることを予想したいからである。一方で「在地系甕」の実態がいまだ不鮮明な現状では、コの字状口縁甕やロクロ甕たる北信型甕の影響の可能性以外に、別の要素も除外できないであろう。林宮原遺跡II（長野原町教育委員会 2004）の「北陸系」花畠遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002）の「北陸・信濃系か」と報告される土師器甕の存在も気にかかる部分である。

さらに、その分布についても注意を払っておきたい。「在地系甕」の主たる分布域は西吾妻地域であると考えられるが、一部は東吾妻地域にまで及んでいる可能性が高いからである。東西を含めた吾妻地域全体での分布状況も、把握すべき課題であろう。長野原町を主体とする西吾妻地域や東吾妻地域の一部は、芋引金具や凸帯付四耳壺、あるいは大小のロクロ甕、黒色土器など、長野原町に分布する遺物の出土が目付く地域である。こうした遺物の分布状況と「在地系甕」の分布状況がどのように異なるのか、検討しておきたい部分である。

**おわりに** 以上のように、西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」は本遺跡群からも出土しており、他遺跡からの出土資料もその類例に追加できる可能性を示した。今回、本遺跡群出土資料以外に実見したものは皆無で、ここに本節での考察上の限界がある。「在地系甕」の評価は今後に委ねられているが、まずは詳細な観察による実態把握が望まれる。そして、「在地系甕」が存在するとすれば、より具体的な定義付けが求められることは言うまでもなく、その上で「在地系甕」の系譜を跡付けることが重要と思う。

#### 註

- (1) ここでいう西吾妻地域とは、現在の吾妻郡西部、長野原町・草津町・中之条町六合地区（旧六合村）・嬬恋村を包括する地域のことである。およそ吾妻渓谷を境として、その西側の地域として認識している。西吾妻地域では長野原町での発掘調査が突出して多く、これはハッ場ダム開削の調査が多いことによる。比べて他町村の調査事例は少ないため、ここで扱う西吾妻地域の様相とは、いきおい長野原町を主体としての様相を示すことになる。
- (2) 本報告書掲載の7点のうち集成から省略した1点は、上原I遺跡遺構外-251の口縁部小破片である。
- (3) 上郷岡原遺跡の2点（第31図5・6）が、前掲（中沢 2009）の編年図中に配置されている。
- (4) 檜木II遺跡は長野原町、千保前田II遺跡は嬬恋村に所在する。各報告書中においては、第32図2以外は「ロクロ甕」として掲載されているものではない。今回、これらの資料を実見したわけではないが、実測図の観察からロクロ甕として判断した。
- (5) 本遺跡群からの大型ロクロ甕は上原III遺跡・上原I遺跡IIで確認しているが、小破片であり今回は非掲載である。同様に非掲載ながら、中棚I遺跡の堅穴住居S104からも肩部相当の破片を確認している。
- (6) 小林眞寿氏によれば、東信地域に分布するロクロ甕について、「北信型」の影響下に出現することはたしかであり、大局的には同一視されようが、しかしそこには無視しえない差異が存在する」ことを指摘している。

#### 引用・参考文献

- 小林真寿 1989 「所謂「北信型の甕」を考える」「佐久考古通信」No.49 佐久考古学会
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 『ハッ場ダム発掘調査集成（1）ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2集
- 2005 『川原湯勝沼遺跡（2）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集
- 中沢 恒 2009 「第5章2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について」「細谷B遺跡」一般県道岩下線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団
- 長野原町教育委員会 2004 『林宮原遺跡II』長野原町埋蔵文化財調査報告 第14集
- 2011 『林宮原遺跡III』長野原町埋蔵文化財調査報告 第23集
- 2013 『山岸II遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第24集

### 第3節 本調査出土の墨書き土器について

**はじめに** これまで報告してきたように、今回の発掘調査は7遺跡で実施された。そのうち、平安時代の集落を検出したのは中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡、上原Ⅰ遺跡Ⅱ、上原Ⅳ遺跡Ⅳの4遺跡である。これらの遺跡からは多くの出土遺物を得たが、なかでも墨書き土器の出土量の多さが目に付く。本調査の前に行われた試掘調査出土分（中棚Ⅰ遺跡・林宮原遺跡Ⅷ）を含めて、5遺跡合計で110点が出土し、本報告書ではその内の82点を掲載した。掲載遺物の遺跡ごとの内訳は中棚Ⅰ遺跡が45点、上原Ⅲ遺跡が33点、上原Ⅰ遺跡Ⅱが2点、上原Ⅳ遺跡Ⅳが1点、林宮原遺跡Ⅷが1点である。

本節では各遺跡の墨書き土器について概観し、その様相を把握したい。詳細な分析は今後の課題として残るが、ここでは基礎的事項についてとりまとめ、多く出土した同一文字「赤」について触れておきたい。

**中棚Ⅰ遺跡出土の墨書き土器** 中棚Ⅰ遺跡では4軒の竪穴住居跡が調査され、その全てから墨書き土器が出土した。掲載した合計45点の内訳は、SI01が3点、SI02が8点、SI03が4点、SI04が26点、遺構外が3点、試掘トレーンチが1点である。非掲載の資料が19点あり、SI02が2点、SI03が5点、SI04が9点、遺構外が3点である。遺構ごとの出土点数では、一見してSI04からの出土量が突出して多いことがわかる。各遺構の帰属時期は、SI01とSI03が9世紀中葉、SI02とSI04が9世紀後半に比定されている。

墨書きされた土器のほぼ全てが須恵器の环あるいは塊であり、一部土師質土器と呼称されるようなロクロ使用酸化焰焼成の环が含まれる。本遺跡からの非ロクロ整形の土師器環の出土は皆無であり、それへの墨書きは認められない。また墨書きされたのは供膳形態の环・塊のみであり、煮炊具への墨書きは確認されなかった。墨書き土器として判断した64点のうち、同一器体の2カ所に墨書きされるものが27点確認でき、それ以外の36点が1カ所の墨書きである。複数個所の墨書きについては、出土破片の残存具合によってその認識が左右されることから不確定的である。墨書き土器64点に対して都合91文字相当の墨書きが確認できた。墨書き位置の詳細は第12表のとおりである。これによれば墨書き位置に明瞭な統一性は認められないが、同一器体に2カ所が墨書きされるものについては、外部底面+内部底面の組み合わせが多い傾向がある。

文字の種類は不明・判読不能を除いて5種が認められ、他に記号状のものも存在する。判読できる5種の内訳は「赤」26点、「人」9点、「山」1点、「吉」1点、「三家」2点である。他に記号状の墨書きが2点あり、不明・判読不能が23点である。「赤」の出土量が最も多く、次いで「人」が多いのがわかる。中棚Ⅰ遺跡を含めて本遺跡群から出土した墨書き文字は1文字を主体とするが、2文字の墨書きとして、ここでは「三家」が出土している。遺構別・文字別の出土点数を%表示にしたものを第37図に示した。

**上原Ⅲ遺跡出土の墨書き土器** 上原Ⅲ遺跡では15軒の竪穴住居跡が調査され、これには竪穴状遺構も含まれている。このうち8軒の竪穴住居跡から墨書き土器が出土し、加えて土坑、性格不明遺構、遺構外からの出土も認められた。掲載した33点の内訳は、SI04が2点、SI05が2点、SI09が1点、SI10が4点、SI12が12点、SI14が5点、SI15が1点、SI16が5点、遺構外が1点である。非掲載の資料が9点あり、SI10・12が1点ずつ、SI14が5点、SK01・遺構外が1点ずつである。出土遺構は複数にわたるが、SI12からの出土量が最も多く、SI14が次ぐ。これらの竪穴住居跡の帰属時期は9世紀後半、あるいは9世紀後半～10世紀前半という時間幅の中でとらえている。

墨書きされた土器のほぼ全てが須恵器の环・塊であり、1点のみ耳皿がある。また非ロクロ整形の土師器の环に人名が墨書きされたものが1点あり、供膳形態の土器が須恵器や土師質土器を主体とする中で特徴的である。煮炊具への墨書きは認められない。墨書きとして判断した41点のうち、同一器体の2カ所に墨書きされるものが16点確認でき、それ以外の26点が1カ所の墨書きである。この認識が出土破片の残存具合に影響されるることは前述と同様である。墨書きの文字数でいえば、合計42点の墨書き土器に対して58文字を確認したことになる。墨書き位置の詳細は第12表のとおりであるが、中棚Ⅰ遺跡と同様に明瞭な統一性は認められない。

文字の種類は不明・判読不能を除いて5種が認められる。その内訳は「赤」2点、「長」11点、「経」1点、

「人」1点、「大」2点、「麻呂」あるいは「磨」1点である。不明・判読不能のものは24点である。「長」の出土量が最も多く、他に特徴的な墨書きとして人名と考えられる「麻呂」あるいは「磨」がある。また、中棚I遺跡での出土量が最も多い「赤」が2点出土していることには注目できる。遺構別・文字別の出土点数を%表示にしたものを第38図に示した。

**上原I遺跡II・上原IV遺跡IVの墨書き土器** 上原I遺跡IIからは2点、上原IV遺跡IVからは1点の墨書き土器が出土した。両遺跡出土の墨書き土器とともに、全て竪穴住居跡からの出土であるが、上原I遺跡SI11出土の1点以外は判読できなかった。この文字は「サ」あるいは「二十」を示す文字であろうか。

**林宮原遺跡VIIの墨書き土器** 林宮原遺跡VIIは、試掘調査を行なったが、本調査の対象から除外された遺跡である。試掘7トレンチから1点出土したが、判読できなかった。

**墨書き土器「赤」について** ひとつの遺跡から同一文字の墨書きされた土器が多く出土する事例は群馬県内でもいくつかの遺跡で周知されている。一例を挙げれば、前橋市堀越中道遺跡からの「立」、玉村町福島稻荷木IV遺跡からの「家」、伊勢崎市大道上遺跡IIからの「也」、東吾妻町諏訪前遺跡からの「山」などがある。他に長野県佐久市聖原遺跡からは「貞」の出土例が知られている。今回の調査で出土した中棚I遺跡の「赤」、上原III遺跡の「長」はこうした遺跡と同様の出土例としてとらえられ、集落の「標識文字」としてとらえられよう。また中棚I遺跡からの「人」墨書き土器も、出土数的には少ないが一定量出土しており、同様の文字であった可能性が考慮される。

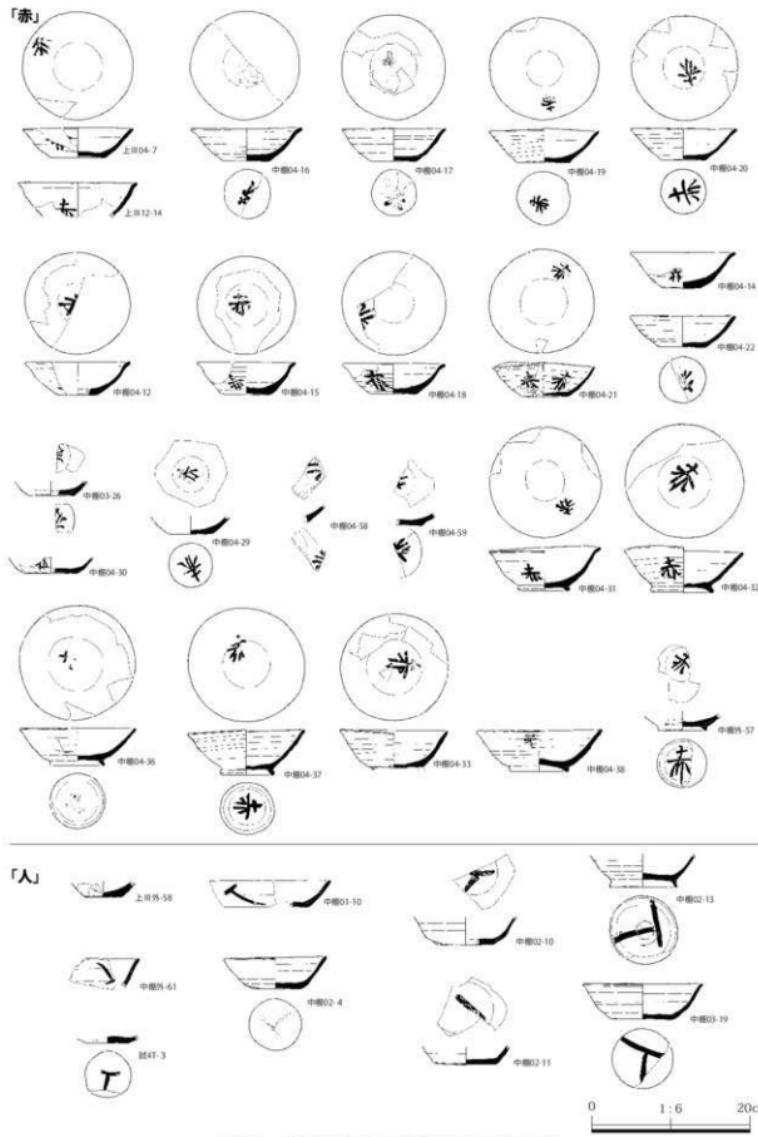
さて、中棚I遺跡から出土した墨書き土器は63点を数え、そのうち「赤」と墨書きされたものが26点、41%を占める。同一器体の2カ所に「赤」が書かれたものが18点あり、残りの8点は1カ所の墨書きが確認できる。再三触れたように、複数個所への墨書きの認定は、その残存状態に影響されることは言うまでもない。2カ所に墨書きされた18点については外面部+内面部9点、外面部+内面部1点、外面部+内面部5点、外面部+内面部3点の組み合わせである。総じて内面に1文字、外面上に1文字の組み合わせになるが、とりわけ外面部+内面部の組み合わせが多い傾向にある。これらの墨書き「赤」は、字体にいくつかの違いが確認できる。

- ①通常型（中棚04-29外面部ほか）
- ②4・5画目が「n」字状に連続して書かれているもの（中棚04-20外面部・中棚外-57ほか）。
- ③7画目が左へ巻き込むように書かれているもの（中棚04-15外面部・中棚04-33ほか）。
- ④7画目の最後が右上に跳ね上がる様に書かれているもの（中棚04-33、上III12-14ほか）。

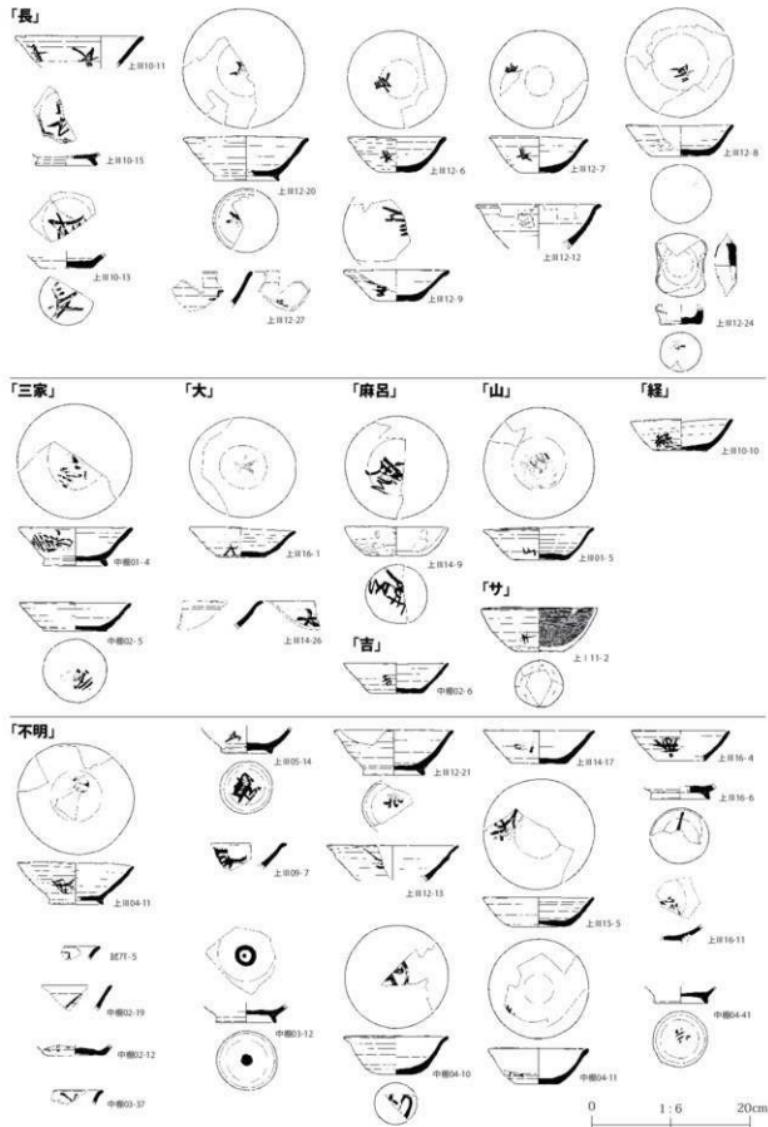
上記以外にも細かい運筆の違いが認められ、字体は多種多様である。また、中棚04-38は唯一細い筆致で書かれており、他の墨書き土器と比べて異質である。底部が盛り上がり、体部がやや扁平など器形も様相が異なる。

このように異なる字体の墨書きが出土している状況から、複数の人物によって書かれたものが集積されていると推測される。SI03出土の2点を除き、その全てがSI04からの出土である。SI04は9世紀後半の時期が比定されており、墨書き土器の盛期にあたっている。完形品に近いものが見られるが、大きく割れたものや破片資料が多く、使用不可となったものが投げ込まれているような状況から、集落全体にあったものがSI04で発見されたと見られる。

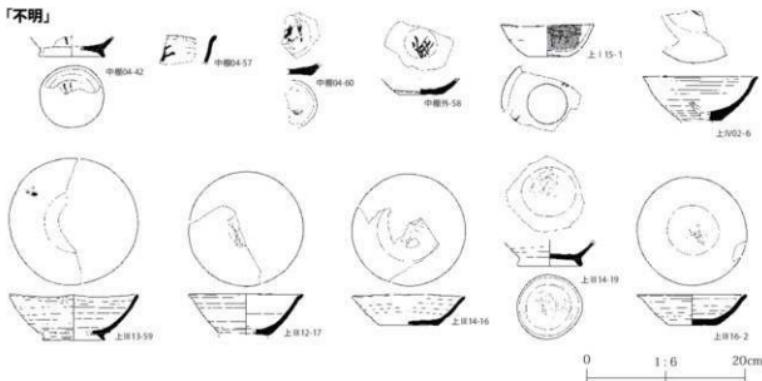
中棚I遺跡の平安時代集落は、その立地する段丘面全体に展開しているものと予想される。西は榎木沢、北と東は急斜面を伴う尾根によって、南は下位段丘面への段丘崖によって画される範囲であり、今回の調査区はその範囲のはば中央部に相当する。ただし、調査では調査区の北側に湿地跡を確認しており、この湿地跡は平安時代には存在していた可能性を把握している。そうであれば、今回の調査区は段丘面の中央部に位置するものの、集落範囲としては、北側に湿地跡を背負うような、集落の北縁付近に相当する可能性も考えられる。湿地跡では湧水の存在が認められ、その南東付近で出土した多くの遺物の存在も考え併せれば、いわゆる「水辺の祭祀」的な行為を想定できるかもしれない。「赤」墨書き土器が集中的に出土したSI04はこの湿地跡に面して構築されており、意識的な占地であった可能性も取捨できない。この点は、「赤」大量出土の背景を探るうえで示唆的である。調査では祭祀遺物の出土がなかったため即断できないが、ひとつの視点として注意してお



第33図 本調査出土墨書き器掲載遺物集成①(1/6)

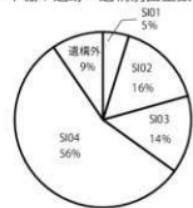


第34図 本調査出土墨書き器揭露遺物集成②(1/6)

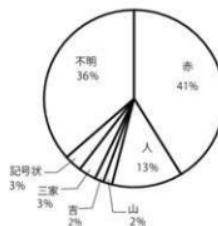


第35図 本調査出土墨書土器掲載遺物集成③(1/6)

中棚Ⅰ遺跡 遺構別出土数

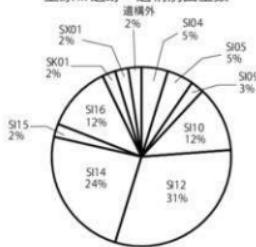


中棚Ⅰ遺跡 文字別出土数

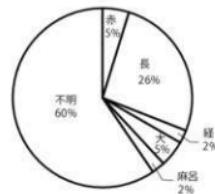


第36図 中棚Ⅰ遺跡出土墨書土器 遺構別・文字別割合表

上原Ⅲ遺跡 遺構別出土数



上原Ⅲ遺跡 文字別出土数



第37図 上原Ⅲ遺跡出土墨書土器 遺構別・文字別割合表

第12表 本調査出土墨書土器一覧表

古跡名 編組番号	遺構名	器種 器形	墨書部位	方向	篆文	備考	遺跡名 編組番号	遺構名	器種 器形	墨書部位	方向	篆文	備考
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-4	S104	須恵器 壺	外面底部 内面部	正	「赤」 「赤」		上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S114	須恵器 壺	内面部	—	「□」 「□」	井開裁
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-4-11	S104	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「□」 「□」		上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S114	須恵器 壺	内面部	—	「□」 「□」	井開裁
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-5-13	S105	須恵器 壺	内面部	—	「□」 「□」		上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	SK01	須恵器 壺	内面部	—	「□」 「□」	井開裁
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-5-14	S105	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「□」 「□」		上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	遺構外	須恵器 壺	外面部	—	「■」 「■」	井開裁
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-6-7	S109	須恵器 壺	外面底部	—	「□」 「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 01-4	S101	須恵器 壺	外面部	横 内面部	「三葉」 「三葉」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-10-10	S109	須恵器 壺	外面底部	正	「経」		中標Ⅰ遺跡 中標 01-5	S101	須恵器 壺	外面部	正	「山」 「山」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-10-11	S110	須恵器 壺・壇	外面底部	倒	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 01-10	S101	須恵器 壺	外面部	正	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-10-13	S110	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-4	S102	須恵器 壺	外面部	—	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-10-15	S110	須恵器 壺	内面部	—	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-5	S102	須恵器 壺	外面部	—	「三葉」 「三葉」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-6	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	正	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-6	S102	須恵器 壺	外面部	正	「吉」 「吉」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-7	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	正	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-10	S102	須恵器 壺	内面部	—	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-8	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「□」 「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-11	S102	須恵器 壺	内面部	—	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-13-9	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	倒	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-12	S102	須恵器 壺	外面部	—	「■」 「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-12	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「長」 「長」	墨書き不確定	中標Ⅰ遺跡 中標 02-13	S102	須恵器 壺	外面部	—	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-13	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	倒	「■」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-13	S102	須恵器 壺	外面部	—	「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-14	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	正	「赤」		中標Ⅰ遺跡 中標 02-13	S103	須恵器 壺	外面部	—	●	記号 黒丸 記号 白丸に点
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-13-17	S112	須恵器 壺	内面部	—	「□」	墨書き不確定	中標Ⅰ遺跡 中標 03-19	S103	須恵器 壺	外面部	—	「人」 「人」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-20	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 03-26	S103	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-21	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	—	「□」 「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 03-37	S103	須恵器 壺	外面部	倒	「■」 「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-24	S112	須恵器 耳皿	外面底部	—	「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-10	S104	須恵器 壺	外面部	—	「■」 「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-12-27	S112	須恵器 壺	外面底部 内面部	正	「長」 「長」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-11	S104	須恵器 壺	外面部	—	「■」 「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-14-9	S114	土師器 片	外面底部 内面部	—	「麻呂」 「麻呂」	「廣」 「廣」	中標Ⅰ遺跡 中標 04-12	S104	須恵器 壺	外面部	—	「■」 「■」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-14-16	S114	須恵器 片	内面部	—	「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-14	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-14-17	S114	須恵器 片	外面底部	—	「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-15	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-14-19	S114	土師器 片	内面部	—	「□」	墨書き不確定 墨書き不確定	中標Ⅰ遺跡 中標 04-16	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-14-26	S114	須恵器 片・壺	内面部	正	「大」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-17	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-15-5	S115	須恵器 片	内面部	—	「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-18	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-16-1	S116	土師器 片	外面底部 内面部	正	「大」 「大」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-19	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-16-2	S116	須恵器 片	内面部	—	「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-20	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-16-4	S116	須恵器 片	外面底部	倒	「□」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-21	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-16-6	S116	須恵器 片	内面部	—	「■」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-22	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ-16-11	S116	須恵器 片・壺	内面部	—	「■」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-29	S104	須恵器 壺	外面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ外-58	遺構外	須恵器 片	外面底部	正	「人」 「人」		中標Ⅰ遺跡 中標 04-30	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S110	須恵器 片	内面部	—	「■」	非開裁	中標Ⅰ遺跡 中標 04-31	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S112	須恵器 片・壺	内面部	—	「■」	非開裁	中標Ⅰ遺跡 中標 04-32	S104	須恵器 壺	外面部	正	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S114	須恵器 片・壺	内面部	—	「□」	非開裁	中標Ⅰ遺跡 中標 04-33	S104	須恵器 壺	内面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S114	須恵器 片	外面底部	—	「□」	墨書き不確定 非開裁	中標Ⅰ遺跡 中標 04-36	S104	須恵器 壺	内面部	—	「赤」 「赤」	
上原Ⅲ遺跡 上Ⅲ	S114	須恵器 片	内面部	—	「□」	墨書き不確定 非開裁	中標Ⅰ遺跡 中標 04-37	S104	須恵器 壺	内面部	—	「赤」 「赤」	

遺跡名 遺跡番号	遺構名	器種 器形	墨書き部位	方向	篆文	備考	遺跡名 遺跡番号	遺構名	器種 器形	墨書き部位	方向	篆文	備考
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-38	S104 壺	須惠器 外面部	側	「赤」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」		墨書き不確定 井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-41	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」		墨書き不確定 墨書き不確定
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-42	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	正	「參」 <sup>†</sup>		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-57	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	正	「參」 <sup>†</sup>		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-58	S104 壺	須惠器 外面部	正	「赤」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」 <sup>‡</sup>		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-59	S104 壺	須惠器 外面部	—	「赤」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-60	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-58	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「■」		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-59	S104 壺	須惠器 外面部	—	「赤」			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚Ⅰ-04-62	S104 壺	須惠器 外面部	側	「人」 <sup>†</sup>			中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	正	「赤」		井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S902 壺	須惠器 外面部	—	「口」 <sup>‡</sup>	紀號 井開観		中棚Ⅰ遺跡 中棚	S104 壺	須惠器 外面部	—	「口」		墨書き不確定 井開観
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S902 壺	須惠器 外面部	—	「■」	井開観		上原Ⅰ遺跡Ⅱ 上Ⅰ-11-1	S11 壺	土師質 外面部	正	「サ」 <sup>†</sup>	内面黒色処理	
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S903 壺	須惠器 外面部	—	「■」	井開観		上原Ⅰ遺跡Ⅱ 上Ⅰ-15-5	S115 壺	土師質 外面部	—	「■」 <sup>†</sup>	内面黒色処理	
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S903 壺	須惠器 外面部	—	「■」	井開観		上原Ⅱ遺跡Ⅳ 上Ⅳ-02-6	S102 壺	須惠器 外面部	—	「■」		
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S903 壺	須惠器 外面部	—	「■」	井開観		中棚Ⅰ遺跡 試試 試47-47	試試 47	須惠器 外面部	—	「人」 <sup>†</sup>		
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S903 壺	土師質 外面部	—	「赤」 <sup>†</sup>	井開観 内面黒色処理		林宮原遺跡Ⅵ 試試 71-5	試試 71	須惠器 外面部	—	「■」		
中棚Ⅰ遺跡 中棚	S903 壺	須惠器 外面部	—	「■」	井開観								

「□」：判読不可・不鮮明 「■」：欠損のため不明

きたい。

なお、吾妻川流域における「赤」墨書き土器は、今回調査した上原Ⅲ遺跡で出土しており、加えて檜木Ⅱ遺跡でも「赤」の可能性のある墨書き土器が出土している。檜木Ⅱ遺跡では上原Ⅲ遺跡で多量出土した墨書「長」や中棚Ⅰ遺跡出土の墨書「三家」も出土しており、各段丘面に展開する同時期集落間の交流を暗示する現象であろう。

**おわりに** 以上、本遺跡群から出土した墨書き土器について概観した。雑駁な内容ながら、集落から多量出土する同一文字墨書き土器の一様相を垣間見た。西吾妻地域における平安時代集落からの墨書き土器資料は増加しており、いずれ、全体的な視点から本遺跡群出土の墨書き土器の検討を試みたい。

## 参考文献

- 吉村 武彦 2003『墨書き土器研究の現在—データベース化された墨書き土器—』『鞍馬史学』第117号
- 吾妻町教育委員会 2004『諏訪前遺跡』平成7年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
- 伊勢崎市教育委員会 2008『大道上遺跡Ⅱ』(仮称)伊勢崎東部ショッピングモール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大胡町教育委員会 1997『大胡西北部遺跡群 堀越中道遺跡』『県営は場整備事業大胡西北部地区』に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『檜木Ⅱ遺跡(1)(平安時代・中世後編)』八ヶ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- 佐久市教育委員会 2005『長土呂遺跡群 聖原』長野県佐久市浅間山麓田切台地上における巨大古代集落遺跡の調査 第5分冊
- 玉村町教育委員会 2011『福島稲荷木IV遺跡・福島稲荷木IV遺跡(第2次調査)』町道2109号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第4節 本調査出土の灰釉陶器について

**はじめに** 今回の林土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査では、上原Ⅲ遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡Ⅱ、上原Ⅳ遺跡Ⅳの4遺跡から灰釉陶器が出土した。上原Ⅲ遺跡と中棚Ⅰ遺跡で出土数の8割以上を占める状況で、遺跡によって灰釉陶器の出土数に差が見られることが確認された。灰釉陶器の分析を行なうことによって、林地区における平安時代集落の様相を把握する手がかりとしたいと考える。

**林土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査で出土した灰釉陶器** 本調査で出土した灰釉陶器は、極小破片を除いたほぼ全ての破片で窯式同定（註1）、器種分類を行ない、一覧表を作成した（第13表）。出土遺跡・遺構は、上原Ⅲ遺跡が竪穴住居跡8軒、土坑1基と遺構外、中棚Ⅰ遺跡が竪穴住居跡3軒と遺構外、上原Ⅰ遺跡Ⅱが竪穴住居跡2軒、上原Ⅳ遺跡Ⅳが竪穴住居跡2軒と遺構外である。

分類した点数は全部で83点あり、そのうち46点を図示し得た。遺跡ごとに見ると、上原Ⅲ遺跡は全28点のうち掲載22点、中棚Ⅰ遺跡は全39点のうち掲載16点、上原Ⅰ遺跡Ⅱは全4点のうち掲載2点、上原Ⅳ遺跡Ⅳは全12点のうち掲載6点である。上原Ⅲ遺跡と中棚Ⅰ遺跡で多数出土している。

窯式別に見ると、岐阜県美濃地方の光ヶ丘1号窯式期は全7点のうち掲載6点、同地方大原2号窯式期は全42点のうち掲載32点、窯式不明が全34点のうち掲載8点である。窯式不明を除くと大原2号窯式期が主体となっている。

**遺跡別に見る灰釉陶器の出土傾向** 上原Ⅲ遺跡は、平安時代の竪穴住居跡14軒のうち半数以上の8軒から出土し、4軒では2点以上が出土している。光ヶ丘1号窯式期は出土しておらず、大原2号窯式期のみである。中棚Ⅰ遺跡は、出土点数は一番多いが小破片が多いため窯式不明のものが多く、掲載点数は上原Ⅲ遺跡よりも少ない状況である。光ヶ丘1号窯式期と大原2号窯式期が出土しているが、大原2号窯式期のものは小破片で覆土から出土したものであることから、流れ込みと判断される。竪穴住居跡の年代は9世紀中葉～後半と合致すると考えられる。上原Ⅰ遺跡Ⅱは、平安時代の竪穴住居跡は11軒と多いが、灰釉陶器が出土した竪穴住居跡は2軒と非常に少ない。出土点数も非掲載遺物を含めて4点と非常に少なく、光ヶ丘1号窯式期と大原2号窯式期が出土している。上原Ⅳ遺跡Ⅳは、平安時代の竪穴住居跡は4軒と少ないので、灰釉陶器は半数の2軒の竪穴住居跡から出土している。出土点数は非掲載遺物を含めて12点と上原Ⅰ遺跡Ⅱに比べると多いものの、上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡よりも大幅に少ない。光ヶ丘1号窯式期と大原2号窯式期が出土しているが、大原2号窯式期の方が主体である。

**林地区における灰釉陶器の様相** 灰釉陶器においては、神谷佳明氏が「榎木Ⅱ遺跡(1)（平安時代・中近世編）」（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008）で詳細な分析を行なっている。その中で「住居の年代は9世紀代が6軒（略）、10世紀代前半が4軒、時期不明が2軒（略）である。この傾向は榎木Ⅱ遺跡から出土した灰釉陶器の窯式期の様相と反比例する状況である。これの状態は9世紀代には灰釉陶器を導入できる富豪層の存在が小さいためと思われる。そして10世紀代には住居間でその所有に差が生じている。」とされている。それを踏まえて、本調査のなかで灰釉陶器が出土した4遺跡を概観すると、出土点数の多い上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡と出土点数の少ない上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡Ⅳに分けられ、出土した灰釉陶器は大原2号窯式期が主体を占めている。遺跡間で所有数に差があるのに加え、上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡では、住居間においても所有数に差があることが確認された。また、林宮原遺跡II（長野原町教育委員会 2004）でも灰釉陶器が出土しているが、大原2号窯式期1点のみである。上記の発掘調査成果は、神谷氏の分析結果を補強するものであり、林地区において灰釉陶器を多数所有できる集団とあまり所有できない集団が存在し、集団内にも持てる者と持てない者の差があったと考えられる。上原Ⅲ遺跡は有力な集団が形成した拠点的集落の可能性が考えられる。

中棚Ⅰ遺跡は、林地区のある段丘面の西端部に位置し、上原Ⅰ～IV遺跡とは離れた場所にある。北西約400mには先述した榎木Ⅱ遺跡がある。榎木Ⅱ遺跡からは、中棚Ⅰ遺跡からも出土している「三家」の墨書き土器が出土している。中棚Ⅰ遺跡は上原Ⅰ～IV遺跡の集落域とは異なり、榎木Ⅰ～Ⅲ遺跡を含む集落域を形成すると



第38図 本調査出土灰釉陶器(1/6)

第13表 本調査出土灰釉陶器一覧表

( )は非開拓遺物点数

遺跡名	遺跡名	光ヶ丘1号窯式期			大原2号窯式期			窯式不明			合計
		罐	皿	縁	輪花罐	皿	輪花皿	耳皿	縁	皿	
上原Ⅲ遺跡	S001		1								1
	S005	4 (2)		1 (1)							5 (3)
	S008	1									1
	S009	1									1
	S011	2				1			(2)		3 (2)
	S012			1							1
	S013	1								(1)	1 (1)
	S016	1	1	1							3
	SK53			1							1
遺跡外	2		1				2				5
小計		13 (2)	1	5 (1)	1			2 (2)		(1)	22 (6)
中棚Ⅰ遺跡	S002	1									1
	S003	1	1	1 (1)					(3)	(1)	(1) 4 (6)
	S004	1	(1)	3 (1)	2	1			(7)	(5)	2 (10) (14)
遺跡外									(2)	(1)	1 (1) (3)
小計	2	2 (1)	4 (2)	2		1		(12)	(7)	1 (1)	3 (1) 16 (23)
上原Ⅰ遺跡II	S009A		1 (2)								1 (2)
	S011	1									1
	小計	1	1 (2)								2 (2)
上原IV遺跡IV	S002	1									1
	S003		2 (3)								2 (3)
遺跡外			1 (1)						(1)	1 (1)	3 (3)
小計	1		3 (4)						(1)	1 (1)	6 (6)
合計	3	3 (1)	21 (10)	1	7 (1)	1	1	2 (15)	1 (7)	1 (2)	4 (2) 46 (37)

考えられる。楡木II遺跡は多数の灰釉陶器（総数183点掲載17点）が出土しており、大原2号窯式期が主体であることから、中棚I遺跡よりも新しい時期の集落跡ではないかと考えられる。

**おわりに** 今回、上原III遺跡と中棚I遺跡で多数の灰釉陶器が出土したため、灰釉陶器の分析を試みた。その結果、本調査で確認された灰釉陶器は10世紀前半の大原2号窯式期が主体であることが確認された。これは林地区の楡木II遺跡と同じ状況であることから、林地区においては大原2号窯式期になってから多数の灰釉陶器が長野県地域を経由して持ち込まれたものと考えられる。

## 註

(1) 神谷佳明氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）に同定していただいた。

## 引用・参考文献

神谷 佳明 2008 「第4章第4節 楩木II遺跡出土の灰釉陶器について」『楡木II遺跡(1)(平安時代・中近世編)』

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第18集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 第5節 鍛冶関連遺構・遺物について

**はじめに** 今回の林土地改良事業に伴う発掘調査において、上原Ⅲ遺跡から鍛冶炉を伴う竪穴建物跡（鍛冶工房跡）が確認された。これまで鍛冶関連遺物を伴う遺構は確認されていたが、鍛冶遺構は確認されていなかったことから、長野原町で初めての検出例となった。これまでに長野原町で確認された鍛冶関連遺物が出土した遺跡をまとめ、長野原町地域における鍛冶活動の様相を確認したい。

**長野原町の鍛冶関連遺物出土遺跡** 現在、長野原町では 20 以上の遺跡で平安時代の遺構の発掘調査が実施されており、その内の 9 遺跡で鍛冶関連遺物が出土している。今回報告している上原Ⅲ遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡Ⅱのほか榎木Ⅰ・Ⅱ遺跡、林宮原遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡である。

遺跡の分布状況は、平安時代遺跡の分布状況と比例して吾妻川左岸側に多く見られ、右岸側は横壁中村遺跡のみである。榎木Ⅱ遺跡よりも西側地域では平安時代の遺跡が確認されているものの、鍛冶関連遺物は出土していない。明確な鍛冶遺構は今回の上原Ⅲ遺跡のほか、事業団が発掘調査を行ない現在整理作業中の三平Ⅰ遺跡で鍛造剥片を伴った竪穴住居跡が確認されている。

**長野原町で出土した鍛冶関連遺物** 長野原町で出土した鍛冶関連遺物の大多数は鉄滓で、羽口が若干出土している。鉄滓は 9 遺跡中 8 遺跡から、羽口は 9 遺跡中 5 遺跡から出土している。その他の遺物は、上原Ⅲ遺跡の鍛冶炉を伴う竪穴建物跡（鍛冶工房跡）から楕形鍛冶津、鍛冶津、粘土質溶解物、鍛造剥片、粒状滓、鉄塊系遺物が出土している。事業団調査の三平Ⅰ遺跡は整理作業中であるため詳細は不明である。

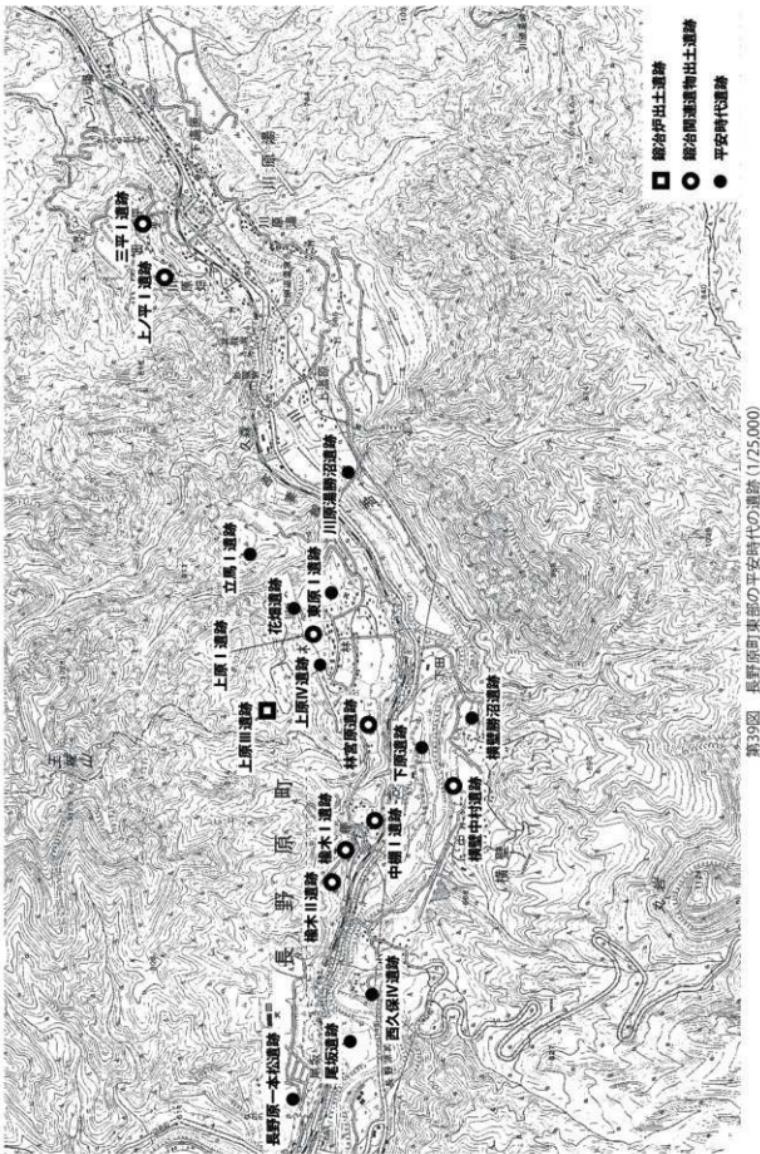
**長野原町域における鍛冶関連遺構の様相** 現在長野原町で確認されている鍛冶関連遺物が出土している遺跡において、明確な鍛冶遺構を伴う遺跡は上原Ⅲ遺跡と不確定ながら三平Ⅰ遺跡のみである。上原Ⅰ遺跡Ⅱでは焼土遺構のそばで楕形鍛冶津・羽口を伴う土坑が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。その他の遺跡は 10 軒以上竪穴住居跡が確認されている遺跡も含まれるが、鉄滓・羽口のみが出土しているという状況であった。上原Ⅲ遺跡と上原Ⅰ遺跡Ⅱで鍛冶関連遺物の分析を行なった結果、2 遺跡とも高純度鉄素材から鉄器を製作する鍛錬鍛冶が行なわれていたと想定された。また、上原Ⅲ遺跡では、遺跡周辺で精錬鍛冶が行なわれていた可能性は考慮する必要があるとされている（第 8 編第 2 章参照）。このような状況から、痕跡が残るほどの大規模で継続的な鍛冶（精錬・脱炭および鉄製品生産）は限られた集落でのみ行われ、その他の集落では痕跡が残らない程度の小規模で限定的な鍛冶（鉄製品の修繕など）を行っていたのではないかと推測される。

上原Ⅲ遺跡で鍛冶工房跡が確認された。また鍛冶関連遺物を出土する複数の遺跡が確認された状況であるが、長野原町では鍛冶の素材となる鉄を製錬していた製鐵遺構が確認されていない。しかしながら、分析の結果、上原Ⅲ遺跡で使われていた鍛冶原料は砂鉄を製錬して作られた製錬鉄塊系遺物と判明した。上原Ⅲ遺跡鍛冶工房跡で鍛造剥片などの微細遺物を収集するため土ごと採取し分類した際、多量の砂鉄が採集された。さらに当時も周囲に炭材に適した木々が多量にあった環境であったと考えられる。製鐵の原料である砂鉄と多量の木炭が確保できる状況であることから、製鐵作業を行なえる下地があったものと考えられ、現在、長野原町域では製鐵遺跡は確認されていないが、存在している可能性は高いと考えられる。

**おわりに** 長野原町で鍛冶関連遺物が出土している遺跡を概観したところ、長野原町域における鍛冶作業には継続的に精錬および鍛錬（鉄製品生産）を行なう限られた集落と、一時的に鍛錬（鉄製品の修繕）を行なう複数の集落が存在するのではないかと考えられる様相が見られた。今後、発掘調査事例が増え、新たな鍛冶炉を伴う遺構や製鐵遺構が発見されることで、長野原町における鍛冶・製鐵の様相がより見えてくると思われる。

### 参考文献

- 澤澤 泰史 2009 「古代群馬の西浦北型製鉄炉」『上毛野の考古学Ⅱ』 群馬考古学ネットワーク  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本高速道路株式会社 2010 『峯山遺跡Ⅱ(古墳時代以降編)一飛鳥時代から奈良時代の製鐵遺跡』 北関東自動車道(伊勢崎~県境)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



第39図 長野原町東部の平安時代の道路(1/25,000)

# 第5章 中・近世の遺構と遺物について

## 第1節 本調査における中世の遺構と遺物

**はじめに** 本調査の中世遺構・遺物の出土量は、林中原Ⅰ遺跡XII以外では極めて少ない。本節では、わずかな該期の遺構・遺物について紹介的に取りまとめる。

**本調査出土の中世遺構・遺物** 今回調査した7遺跡のうち、中棚Ⅰ遺跡と上原Ⅱ遺跡では中世遺構・遺物は出土せず、林中原Ⅰ遺跡XIIを除いた4遺跡から出土した中世遺構・遺物は極めて少ない。特に遺構の検出は皆無に近く、上原Ⅰ遺跡ⅡのSK49が中世に帰属する可能性を考えるのみである。ここからは内耳鍋の内耳部分破片が出土している。他に上原Ⅰ遺跡Ⅱでは古瀬戸の瓶子あるいは壺の小破片、皇宋通宝などの北宋銭4点が出土している。いずれも遺構に伴わないが、4点の北宋銭は同一グリッドからの出土である。この付近に中世の土壤層が存在した可能性も考えられるが、調査では遺構の痕跡を見出すことはできなかった。次に、上原Ⅲ遺跡と林中原Ⅱ遺跡Xではそれぞれ1点の内耳鍋破片を報告した。前者がグリッド出土の底部小破片、後者が理窓谷から出土した体部小破片である。器種認定には迷う部分もあったが、今回は両者を内耳鍋として判断した。底部破片の上原Ⅲ遺跡出土資料は、あるいは焰烙の可能性も残されている。一方、上原Ⅳ遺跡IVの1号遺物包含層からは縁泥片岩の板状破片が出土している。本書ではこれを板碑の可能性のある資料として掲載したが、この包含層は縄文時代の遺物を主体的に出土するため、即断はできない。他に上原Ⅳ遺跡IVでは内耳鍋の小破片2点、青白磁梅瓶の小破片1点、洪武通宝1点が出土した。内耳鍋と判断した2点はとともに底部の破片資料であるため、焰烙の可能性も残る。青白磁梅瓶は肩部相当と判断した小破片である。これは調査区からの採集品であるため資料的制約があるが、その存在には注目できよう。洪武通宝はグリッドからの出土であり、こちらも遺構に伴わない。

本節ではその詳細に触れないが、林中原Ⅰ遺跡XIIは中世～近世を時期的主体とする遺跡である。調査では林城の一部と中世～近世の屋敷跡と考えられる遺構を検出し、群馬県埋蔵文化財調査事業団による先行調査事例に新たな知見を加えた。林城については、事業団による調査成果で「第5区画」と報告された場所に連続する平坦面と石垣が発見されている。この平坦面からは少量ながら複数のピット・土坑が検出され、その一部には直線的な配列が見出せるという。このピット列を積極的に評価すれば、平坦面の南縁付近に、塀あるいは柵といった構造物を想定することも可能であろう。また調査区から広範に見つかったピット、さらに掘立柱建物跡が屋敷地を構成する遺構と考えられ、事業団調査例と同様である。これら的一部からは中世遺物が出土しており、量的には必ずしも多くないものの、本遺跡群全体では相対的に最も多い。15世紀前後の遺構が含まれていると想定されるが、近世遺物を出土する遺構も存在することから、本書では全般的に「中世～近世の帰属」として幅を持たせて報告している。帰属時代の絞り込みを含め、詳細な分析は今後の課題として残る。

**おわりに** 以上、本調査で出土した中世の遺構・遺物について概観した。本遺跡群で調査した7遺跡のうち、当該期の遺構・遺物が出土したのは、上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅲ遺跡・林中原Ⅱ遺跡X・上原Ⅳ遺跡IVの4遺跡と、林中原Ⅰ遺跡XIIを併せた5遺跡である。中棚Ⅰ遺跡と上原Ⅱ遺跡では明確な中世遺構・遺物は出土していない。林中原Ⅰ遺跡XIIを除けば、本遺跡群全体での中世遺構・遺物の出土頻度は極めて低調である。生産域の問題など、土地利用の在り方は別に検討を要するが、今回の調査成果についてみれば、本遺跡群における中世の居住痕跡は希薄であったと言える。林地区の最上位段丘面においては、林中原Ⅰ遺跡および林城が、その中核を占める遺跡であったとみなすことができよう。

## 参考文献

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014 『長野原城跡 林中原Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

## 第2節 林中原II遺跡Xの近世建物について

**はじめに** 林中原II遺跡Xでは、出土遺物やAs-A軽石の堆積から近世に帰属すると考えられる建物跡が2棟検出された。1棟は掘立柱建物跡(SB01)、もう1棟は礎石と掘立が混合した建物跡(SB02)である。そして約30m東には東原I・II・III遺跡があり、事業団調査で近世の掘立柱建物跡や礎石建物跡が検出されている。今回の調査結果に基づいて、近世の頃の本遺跡周辺の状況を考えてみたい。以下、事業団調査の○号掘立柱建物跡を「○掘立」、○号礎石建物跡を「○礎石」、○号柱穴列を「○柱」と省略する。

**林中原II遺跡Xと東原I・II・III遺跡との比較** 本遺跡や東原I・II・III遺跡の建物跡の主軸や規模などをまとめた表を作成した(第14表)。まず、年代であるが本遺跡のSB02の溝跡でAs-A軽石の堆積が認められ、近世陶器などが出土したことから江戸時代後期に帰属するものと考えられる。SB01も出土遺物から江戸時代後期のものと思われる。東原I・II遺跡は近世陶器、中世陶器が出土し、東原III遺跡では本遺跡と同様な資料が多く出土していることから、東原III遺跡の多くの掘立については本遺跡と同時期に帰属するものと考えられる。しかし異なる時期のものとして、70区2掘立は中世に帰属し61区1礎石は近代まで下る可能性があると報告されている。

また報告書によれば掘立柱建物跡の周辺に人為的な削平面が確認され、掘立柱建物の建築と同時に削平された可能性が述べられている。本遺跡では遺構検出面に近い深さまで段切りなどが及んでいたにもかかわらず、建物を構成するピットなどが残存していた。このことから本遺跡においても掘立柱建物建築の際に、削平が行われた可能性があろう。のちの畠の段切りも、地形を利用し極端な深掘りをしていないのならば、建物跡が残存していたことにも領けるのである。

さて第14表を参照していただくと、本遺跡の建物と東原III遺跡の建物の主軸方位が±10°の間にほぼ收まり、同じような方向を向く建物が建っていたと考えられる。4掘立のみが違う方向を向いていた。これらの掘立はSB01と規模も似たようなものである。それに対して1礎石は他よりも規模が大きい。本遺跡でも礎石と掘立が混在したようなSB02がそれに近い規模である。

**おわりに** 以上のように主軸方位や規模が似たような建物が、本遺跡周辺に存在していたことがうかがえる。距離の近さから同じ集落内の建物であったと考えられる。そして本遺跡3~5区や東原I遺跡の大部分は遺構が少ないとから、居住域ではない土地利用が想定できよう。



第40図 東原III遺跡全体図(一部抜粋・1/400)

### 参考文献

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『東原I・II・III遺跡』ハッ場ダム建設に工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書 第35集

第14表 捣立柱建物跡比較表

遺跡名	遺構名	主軸方位	南北 (m)	東西 (m)	時期
東原I	80区1柱立	N.-83°-W.	3.73	3.76	中世～近世
東原I	80区2柱立	N.-2°-W.	3.18	1.90	中世～近世
東原I	80区1柱立	N.-2°-W.	-	-	中世～近世
東原II	80区4柱立	N.-83°-E.	1.55以上	3.25以上	近世
東原III	70区1柱立	N.-86°-W.	6.44	8.54	新しい、70区4号柱立とは新旧不明。
東原III	70区2柱立	N.-73°-W.	3.72	4.10	中世
東原III	70区3柱立	N.-63°-W.	3.54	6.20	近世、70区1・4柱立より古い。
東原III	70区4柱立	N.-10°-W.	6.62	6.58	近世、70区3柱立より新しい、70区1号柱立とは新旧不明。
東原III	61区1礎石	N.-76°-W.	3.72	10.30	近世後半～近代前半
林中原II	SB01	N.-76°-W.	6.50	3.0以上	近世(江戸時代後期)
林中原II	SB02	N.-76°-W.	5.4～7.0	11.0～13.3以上	近世(江戸時代後期)

## 第6章 総括

**はじめに** 林地区土地改良事業に伴い、3か年にわたり上原Ⅱ遺跡、上原Ⅲ遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡Ⅱ、上原Ⅳ遺跡Ⅳ、林中原Ⅰ遺跡ⅩI、林中原Ⅱ遺跡Ⅹの7遺跡の発掘調査を実施した。林地区の立地する最上位段丘面において、これまで局所的であることが多かった発掘調査成果が、複数遺跡にまたがる広範囲を一括的に発掘調査を行なうことによって面的に様相を捉えることが可能となった。今回の発掘調査では、各遺跡とも貴重な成果を得ることができた。ここで、各遺跡および遺跡間で確認された成果を取りまとめる。

**上原Ⅱ遺跡** 段丘面の上位に立地する縄文時代中期初頃～前葉の集落跡で、西側に上原Ⅲ遺跡がある。住居跡の可能性が高いと考えられる竪穴状遺構から五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ⅰa式の良好な遺物が出土した。尾根を挟んで東側の立馬Ⅱ遺跡、西側の榎木Ⅱ遺跡で同時期の集落が確認されており、その関係性について考えることが今後の課題であろう。

**上原Ⅲ遺跡** 段丘面の上位に立地する平安時代の集落跡を主体とする遺跡である。押手沢を挟んで東側に上原Ⅱ遺跡がある。9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡14軒と竪穴状遺構1軒が確認された。住居跡の1軒は鍛冶炉を作り鍛冶工房跡であり、長野原町で初めて確認された鍛冶廻道遺物の分析の結果、高純度鉄素材から鉄器を製作する鍛鍊鍛冶が行なわれていたと想定された。また、灰釉陶器と墨書き土器(「長」多数、「麻呂」、「経」など)が多量に出土していることから、有力な集落であったと推測される。

**中棚Ⅰ遺跡** 段丘面の西端部に立地する平安時代の集落跡を主体とする遺跡である。本調査の他の6遺跡とは離れており、それらとは異なる活動域と思われる。縄文時代早期後半の遺構・遺物が確認された。近在する榎木Ⅱ遺跡で同時期の竪穴住居跡が確認されており、関連があるものと考えられる。平安時代集落は9世紀中葉～後半の竪穴住居跡4軒が確認され、一辺6m超の大きな竪穴住居跡が存在する。1軒の竪穴住居跡から多量の「赤」墨書き土器が出土したほか、灰釉陶器が多数出土している。榎木Ⅱ遺跡で確認された「三家」墨書き土器が本遺跡からも出土していることから、その関連が指摘される。灰釉陶器・墨書き土器が多量に出土している状況は、上原Ⅲ遺跡と同様に有力な集落であったと思われる。

**上原Ⅰ遺跡Ⅱ** 段丘面の中位に立地する縄文時代前期～中期、古墳時代前期および平安時代の集落跡を主体とする遺跡で、西側に上原Ⅳ遺跡が隣接する。縄文時代前期は花積下層Ⅰ式土器を主体とするが、長野原東信地域を主体とする塚田式土器の特徴も見受けられる様相が確認された。弥生時代前期の特徴的な文様が施文される短頭壺を作り土坑と、長野原町では初となるS字彫を伴う古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されたことは注目に値する。平安時代の集落は他遺跡と同様に9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡が確認された。上原Ⅲ遺跡と中棚Ⅰ遺跡が多量の墨書き土器・灰釉陶器を出土しているのに対し、本遺跡からはほとんど出土していない。このような状況から、本遺跡は上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡とは集落の性質が異なると考えられる。

**上原Ⅳ遺跡Ⅳ** 段丘面の中位に立地する縄文時代後期、古墳時代後期および平安時代の集落跡を主体とする遺跡で、東側に上原Ⅰ遺跡が隣接する。縄文時代は後期の竪穴(敷石)住居跡と後期～晚期の遺物包含層が確認された。隣接する事業団平成15年度調査区と合わせて集落域を形成する。古墳時代後期は、1軒の竪穴住居跡からセット関係を把握できる一括資料が出土した。平安時代の集落は9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡が確認された。上原Ⅰ遺跡Ⅱと同様に墨書き土器・灰釉陶器はほとんど出土していない状況であることから、上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡とは性質が異なるのであろう。

**林中原Ⅰ遺跡ⅩI** 段丘面の下位に立地する中～近世の林城関連遺構を主体とする遺跡であり、事業団平成19～21年度調査区の隣接地を調査した。縄文時代前期は竪穴住居跡1軒のみが確認された。平安時代の遺構は階し穴のみで、事業団調査分を含めても竪穴住居跡は確認されていない。平安時代において、本遺跡の立地する段丘面下位は居住域以外の用途で使用されていたと推測される。中世～近世の林城関連の遺構は、事業団調査区から続く平坦面(郭)が確認されたほか、事業団調査区で確認された掘立柱建物跡域が南へ広がることが確認され、林城及び周辺地域の様相をより広く確認することができた。

**林中原II遺跡X** 段丘面の下位に立地する縄文時代中期と近世の集落跡である。縄文時代中期は竪穴住居跡1軒が確認された。周辺の調査事例においても同時期の竪穴住居跡が確認されている状況から、集落域が広がるものと考えられる。近世は礎石・掘立柱建物跡2棟、土坑16基、ヤックラ2基などが確認され、土坑には墓と考えられるものがある。東に隣接する東原I・II・III遺跡でも同時期の掘立柱建物跡が確認されており、同一の集落であったと考えられる。

**おわりに** 今回発掘調査を行なった7遺跡では、主に縄文時代と平安時代において長野県地域との交流を示唆する遺物が確認された。縄文時代では早期の押型文土器、前期の塙田式土器、中期の郷土式土器・柄倉式土器・深沢式土器、などが挙げられる。後期に関しては、本調査では目立った資料は確認できなかったが、周辺の林中原I遺跡IV出土資料をもとに設定された「林中原型」深鉢がある。「群馬県西部から長野県・新潟県の一部を中心的に分布する、特徴的な土器群」(鈴木2012)とあるように、長野原町では後期においても長野県地域との交流が認められる。平安時代ではロクロ甕や内黒土器が長野県地域で広く使われている土器であり、本調査でも一定量の遺物が確認されている。本調査では確認されなかったが、林宮原遺跡VI(長野原町教育委員会2011)で麻布生産に使われた芋引金具が出土しており、この遺物も長野県地域との交流を示唆するものである。吾妻郡における長野県地域との関係については、中谷治宇次郎氏が『人類学雑誌42巻第10号』において、「この他に於ける吾妻郡地方の各遺跡は、余の瞥見した材料に依れば、何れも隆盛なる意匠を伴はない厚手式遺物に属し、信州地方の外縁地帯の感を催しむるものがある。」と述べており、古くから考察されていた。今回の発掘調査で長野県地域との関わりを示す遺物が蓄積され、今後も発掘調査が行われ、各時代での資料が増加することでより詳細に把握することが可能になるものと思われる。

#### 引用・参考文献

- 鈴木 徳雄 2012 「堀之内式土器研究の課題」『第25回 縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会  
中谷 治宇次郎 1927 「上野國吾妻郡の先史考古學的考察」『人類学雑誌』42巻第10号 日本人類学会  
長野原町教育委員会 2011 『林宮原遺跡VI』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集